

野洲川の環境の特徴

1. 河川全般の特徴

【調査対象地】

野洲川はその源を鈴鹿山系の御在所山（標高1210m）に発し、村川、柚川、大山川など90におよび支川を合流した後、琵琶湖に注ぐ。

このうち、河川水辺総括資料の作成を行う調査対象地（琵琶湖工事事務所直轄管理区間）は琵琶湖への流入部0.0km地点から石部頭首工付近である13.8km地点の区間である。

【野洲川を特徴づける主な要因】

調査対象地は広い低水敷に対して流路（流路）の占める幅が小さく、流路は低水敷内で複雑に蛇行、分流を繰り返している。この傾向は自然河川区間である落差工上流で顕著であり、逆に人工放水路区間である下流ではやや単調となる。また、自然河川区間では低水敷だけでなく堤防や高水敷にもヤナギ林や竹林がみられるが、人工放水路区間の堤防や高水敷は比較的単調な刈り取り草地やグラウンド等が続いている。

【野洲川における環境の特徴】

調査対象地を大きく分けると7.2km付近の落差工を境として、人工放水路区間である下流側と自然河川区間である上流側に分けられる。落差工より下流側では高水敷がグラウンドや公園等として利用されている箇所が多く、樹林は低水敷の中州等にみられるのみである。一方、上流側では中州以外にも高水敷や堤防の一部がヤナギ林や竹林等の樹林となっている箇所も見られる。

河口付近から稲荷大橋付近（0.0～2.4km付近）にかけては広い開放水域が広がり、止水に近い環境となっており、中州にはヨシやウキヤガラ等の湿性植物群落広がっている。

稲荷大橋から落差工（2.4～7.2km付近）では流路が狭くなり、早瀬や淵が多くみられ、より流れに強いツルヨシ群落が比較的多くなる。また、高水敷は公園やグラウンドとして利用されている箇所もみられる。

落差工から野洲川大橋（7.2～10.6km付近）では下流に比べて流路の蛇行幅が広くなり、早瀬や淵が多く見られる。また高水敷には公園やグラウンドが多くみられるが、樹林等の樹林も比較的多くみられる。

野洲川大橋から石部頭首工（10.6～13.8km付近）では低水敷の状況は下流と似た状況であるが、公園等の高水敷利用はほとんど見られず、竹林が多く見られるほか、落葉広葉樹林も比較的多く見られる。

【河川環境による野洲川の区分】

以上の状況を踏まえると、調査対象地の河川環境は以下の4区間に大きく区分することができる。



野洲川の環境の特徴

2. 動植物の生息・生育状況（概要）

【植物の生育状況】

区間1では中州の大部分にヨシやウキヤガラ等の湿性草本群落広がっており、ヤナギ林もパッチ状に成立している。高水敷は刈り取り草地やセイタカアワダチソウ群落等の乾性草本群落が多くみられる。

区間2では中州の大部分に湿性草本群落とヤナギ林が広がっているが、下流に比べると流路が狭くなり、流れが速いため、より流れに適応したツルヨシ群落が多く見られる。高水敷と堤防の大部分では刈り取り草地やセイタカアワダチソウ群落がみられる。

区間3では低水敷の植生は区間②と似た状況であるが、下流に比べるとヤナギ林が少ない。高水敷には公園やグラウンドが多くみられ、落葉広葉樹林や植林も比較的多くみられる。

区間4でも低水敷の状況は下流と似た状況であるが、竹林が多く見られるほか、落葉広葉樹林も比較的多く見られる。また、石部頭首工下流の右岸側では河川改修工事が行われており、植生が消失している箇所もみられる。

【動物の生息状況】

区間1の水域は止水に近い環境となっており、イトモロコやゼゼラといった琵琶湖に分布する魚類が生息しているほか、外来種であるブラックバスやブルーギルが生息している。また水域とその周辺にはウシガエルやミシシippiaカミミガメといった外来種の両生類も生息している。

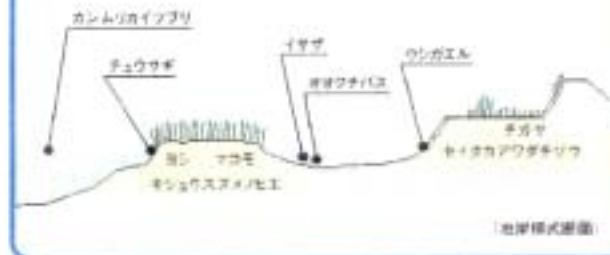
区間2の水域は下流に比べて流路が狭くなり、流れが速い箇所が多いが、魚類相全般は区間1と似通っており、特筆点としては産卵のため遡上したビワマスがこの区間より上流で確認されていることが挙げられる。水域及びその周辺の湿性草地にはトノサマガエルやウシガエルが生息しており、カワウやサギ類の集団分布地（主な採餌場所と思われる）も確認されている。また、陸域では高茎草地（ツルヨシ等）を中心としてカヤネズミやイタチ属の一種などが生息している。

区間3から4の水域はほぼ似た様相を呈しており、区間2と比べて蛇行の幅が広がっているほかは大きな変化はみられない。魚類相は下流に比べて際立った変化は見られないが、シマドジョウ、アジメドジョウ、カワヨシノボリは区間4のみで確認されている。水域及びその周辺ではウシガエルやトノサマガエルが生息しているほか、カワウやサギ類の集団分布地（主な採餌場所と思われる）も確認されている。陸域の草地や樹林ではアマガエルやアオダイショウ、タヌキ、キツネ等が生息している。

1 河口付近

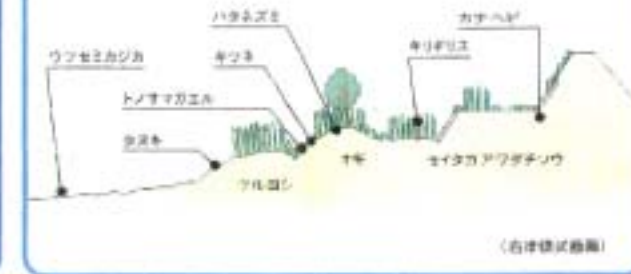
野洲川の河口に近く、大きな中洲と広い開放水面が特徴である。

河道と高水敷は人工護岸によって分断されている。高水敷は、人工雑草地やセイタカアワダチソウ群落などの荒れ地となっているが、中洲には湿性草地が成立しているほか、広い水面が存在する。



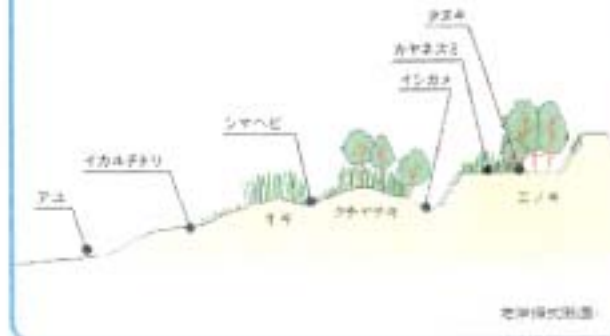
2 落差工～服部大橋付近

高水敷はセイタカアワダチソウ群落などの荒れ地となっているが、低水路内には、中洲や寄り州、ワンドなどの環境が形成され、自然雑地のほか、ツルヨシやオギ等の草地在りみられる。



3 JR橋梁付近

高水敷の一部は公園利用されているものの、エノキやムクノキの樹林がみられるほか、低水路内にはオギやツルヨシ、タチヤナギ等の植生が成立している。



4 名神橋梁付近

高水敷は、クズに覆われた範囲が広いものの、竹林が面的に成立している。低水路内には広大な自然雑地が存在するほか、ツルヨシやオギ、セイタカアワダチソウ等の草地在りみられる。



※出典：「野洲川の環境」（国土交通省 琵琶湖工事事務所）



河口部の中洲
カンムリカイツブリ
パン、オオパン、栗、築船

カンムリカイツブリ

この区間で報告されている貴重な動物

魚介類 アユ、イサザ、イトモロコ、イボカウニナ、ラツセミカサガ、オオタニシ、カネヒラ、カラスガイ、カワムツA型、ギンナ、ゲンゴロウフナ、コイ、コウライニゴイ、スゴモロコ、タチバナカウニナ、タチバナガイ、ナマス、ニゴロフナ、ハス、ビワマス、ホンモロコ、マンジス、モウズガニ、モツゴ、モノアラガイ

底生動物 クロダカウニナ、コシダカヒメモノガイ、ヌマエビ、マジシミ、モノアラガイ

植物 クコノアシ

鳥類 アカアシシギ、アカツクシガモ、イルカチドリ、オオタカ、オオパン、オオヨシキリ、カイツブリ、カワウ、カワセミ、カンムリカイツブリ、コアジサシ、コハクチョウ、セッカ、タゲリ、タヒバリ、チュウサギ、ツクシガモ、ハヤブサ、パン、マカモ

魚介類 (0.0~0.8km)

種名	夏季	7.1 産卵期	秋季	11.1 産卵期	初春
オイカワ	○	○	○	○	○
トウヨシノボリ	○	○	○	○	○
カネヒラ	○	○	○	○	○
ブルーギル	○	○	○	○	○
ゼゼラ	○	○	○	○	○
ヌマエビ	○	○	○	○	○
アユ	○	○	○	○	○
ギンナ	○	○	○	○	○
ブラックバス (オオクチバス)	○	○	○	○	○

※総種数で上位10種を示した

鳥類 (0.0~1.0km)

種名	雄	雌	幼鳥	繁殖期
カイツブリ	2	11	21	4
アオサギ	1	6	11	1
アマサギ			18	
ムクドリ	3	14		
カワウ		3	1	12
シロコトクヅバ		16		
タイサギ	1	7	4	
トビ	2	6	1	1
カルガモ		5	4	
トビ	6	3		
合計種数	6	8	8	4

※種内の数値は個体数を示す
※総種数で上位10種を示した

【河川水辺の国勢調査地点】

- 魚介類
- 底生動物
- 植物相
- 植生 (コト) 地点
- 鳥類
- 小動物
- 陸上昆虫類

【凡例】

- 直轄管理区間
- 距離標
- 流れの向き
- 護岸
- 水制工
- 横断構造物
- 樋門

横断構造物
道 (通水道路) 堤 (取水道路)
堤 (築堤護岸) 生 (自然護岸)
他 (不明) の物
堤 (堤、築堤)

底生動物 (1km)

綱名	目名	種数
ワキガイ綱	イシガイ目	1
	ニナ目	4
	ハマグリ目	1
	モノアラガイ目	4
ミミズ綱	ナガミミズ目	10
	エビ目	3
甲殻綱	カゲロウ目	8
	カメムシ目	4
同虫綱	カワゲラ目	1
	コウチュウ目	3
	トビウオ目	4
	トンボ目	2
	ハエ目	27
	蚊目	1
環形綱	ウスムシ目	1
合計種数		73

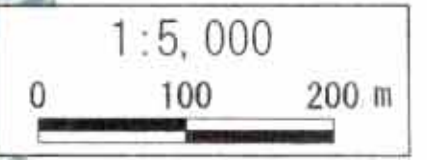
魚介類 (0.8~2.8km)

種名	夏季	7.1 産卵期	秋季	11.1 産卵期	初春
ヌマエビ	○	○	○	○	○
アユ	○	○	○	○	○
ブラックバス (オオクチバス)	○	○	○	○	○
オイカワ	○	○	○	○	○
カマツカ	○	○	○	○	○
トウヨシノボリ	○	○	○	○	○
ギンナ	○	○	○	○	○
カムルチー	○	○	○	○	○
カネヒラ	○	○	○	○	○

※総種数で上位10種を示した

環境区分凡例 (野洲川)

環境区分	主な植物	主な動物	凡例
草畑	雑草	ツルコノボリ、シロネ、ウキクサ、カサネ	草畑
牧草地	クサ、シロネ、シロネ、セキダク、アザミ、クサ		牧草地
畑	ササ、ササ	ササ、ササ	畑
農地	ササ、ササ	ササ、ササ	農地
森林	ササ、ササ	ササ、ササ	森林
公園	公園	公園	公園
人工構造物	人工構造物	人工構造物	人工構造物
山	山	山	山



野洲川河川環境情報図 (区間図) -1/8

この区間で報告されている貴重な動物 7.0-8.0km

(魚介類) アカザ、アユ、ウツセミカジカ、カネヒラ、カワムツA型、カワヨシノボリ、キナ、ギンブナ、コイ、コウライニゴイ、スゴモロコ、ズナカニゴイ、スナヤツメ、タモロコ、ドジョウ、ナマス、ハス、ビワマス、マシジミ、マツカサガイ、マルタニシ、モツゴ、コシダカヒメモノアラガイ、ヌマエビ、マシジミ、モノアラガイ、タコノアシ

(底生動物) アリスイ、イルカサドリ、オオタカ、オオコシキリ、カイツブリ、カワウ、カワセミ、クサシギ、コジュケイ、コナドリ、シメ、セツナ、クビバシ、チュウサギ、バニマシコ

(鳥類) トノサマガエル、シュレーゲルアオガエル

(小動物) キボンアシナガバシ、モンズズメバシ、ヒラタクワガタ、セグロアシナガバシ

【凡例】

- 直轄管理区間
- 距離標
- 流れの向き
- 護岸
- 水制工
- 横断構造物
- 樋門

(橋造物種別)
 橋(通常護岸) 堤(堤本護岸)
 架(架設護岸) 土(土留護岸)
 他(不明、その他)
 堤(堤、護岸工)

魚介類 6.0-7.0km

種名	夏季	7.1 産卵期	秋季	冬期 産卵期	初春
オイカワ	○	○	○	○	○
トウヨシノボリ	○	○	○	○	○
アユ	○	○	○	○	○
コラックバス (オオコナギ)	○	○	○	○	○
カマツカ	○	○	○	○	○
ヌマナギ	○	○	○	○	○
カネヒラ	○	○	○	○	○
ビワマス	○	○	○	○	○
カワムツA型	○	○	○	○	○
ギンブナ	○	○	○	○	○

※距離標数で上位10種を示した

カワセミ

鳥類 6.0-7.0km

種名	夏季	秋産卵	秋産卵前	繁殖期
コサギ	61	6	1	1
ホオジロ	8	13	1	10
カワウ	10	2	18	
スズメ	2	11	5	7
カワウ	9	2	1	
セグロセキレイ	4	4	4	4
ハシブトガラス	6	3	1	2
アオサギ	1	6	2	2
オオコシキリ				10
ムクドリ	5	8	2	7
合計種数	5	8	9	9

※特内の数値は個体数を示す
 ※距離標数で上位10種を示した

鳥類 7.0-8.0km

種名	夏季	秋産卵	秋産卵前	繁殖期
ホオジロ	7	7	3	11
カワウ	3	1	20	3
コサギ	22	3		
カワウ	4	8	12	
ツグミ	21			
ムクドリ	6	1	12	
ハシブトガラス	6	1	6	5
キジバト	3	2	3	6
スズメ	2	2	2	8
ヒバリ	2	2	2	8
合計種数	7	9	7	8

※特内の数値は個体数を示す
 ※距離標数で上位10種を示した

小動物 6.0-8.0km

分類	種名	初夏	夏季	秋季	冬季
両生類	アマガエル	○	○		
	トノサマガエル				
爬虫類	ウシガエル	○			
	イシガメ			○	
哺乳類	モグラ属の一種				○
	アカネズミ	○			○
	カヤネズミ				○
	クヌギ	○			
	キツネ	○		○	
イタチ属の一種				○	
合計種数	5	2	3	4	

陸上爬虫類 8.0-9.0km

低水敷	高水敷	河川林
トノサマガエル	トノサマガエル	トノサマガエル
ウシガエル	ウシガエル	ウシガエル
イシガメ	イシガメ	イシガメ

底生動物 8.0km

種名	目別	種数
ウスムシ類	ウスムシ目	1
ヒル類	ウオビ目	1
	種数	1
マキガイ類	モノアラガイ目	1
ニマイガイ類	ハマグリ目	2
ヒメズミ	オビズミ目	1
ナガミズミ	ナガミズミ目	1
甲殻類	エビ目	2
	カワガムシ目	1
両生類	カワガムシ目	1
	カマムシ目	3
	カワガムシ目	7
	コウチウ目	14
	トビケラ目	10
	トビケラ目	1
	トビケラ目	12
	ハエ目	33
合計種数	ウスムシ目	1
	合計種数	100

環境区分凡例 (野洲川)

環境区分	環境区分	主な動植物	凡例
陸域	雑草地	ツル、シシトフ、ヨシ、コキヤカフ、コシ、カ	
	牧草地	カス、シバ、シバ、セイウカ、アリアリ、アリアリ	
樹林	ササ類	ササ、ササ、ササ	
	常緑広葉樹林	ムク、ク、ク、ク	
	針葉樹林	ヒノキ、ヒノキ、ヒノキ	
	竹林	マダケ、マダケ、マダケ	
	その他	マダケ、マダケ、マダケ	
水域	河川	カワガムシ、カワガムシ	
	公園、遊園地	公園、遊園地	
	人工構造物	人工構造物	
水質	汚濁	汚濁	
	濁	濁	
止水	止水	止水	

【河川水辺の国勢調査地点】

- 魚介類
- 底生動物
- 植物相
- 雑生 (1+ 地点)
- 鳥類
- 小動物
- 陸上爬虫類

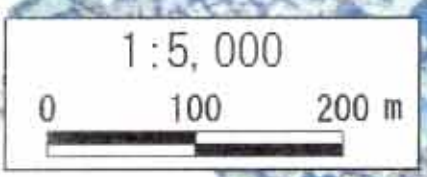


図 野洲川河川環境情報図 (区間図) -5/8

小動物 (0.6~3.4km)

分類	種名	初年度	2年度	3年度	4年度
両生類	アマガエル	○	○		
	トノサマガエル				
	ウツガエル	○			
爬虫類	ヘビ			○	
	シマヘビ			○	
哺乳類	モグラ属の一種				○
	アカネズミ	○			○
	カヤネズミ				○
	タヌキ	○			
	キツネ	○		○	
	イタチ属の一種				○
合計種数		5	2	3	4

落葉広葉樹林を残し、小規模なヤナギ林、竹林を伐採し、造成中

野上段電線 (0.1~0.0km)

種名	種数	種数	種数
カワウ	4	350	2
カシラサギ	46		6
キツネ	9	7	6
ハシロガサ	2		3
シヨウワウツバメ			11
コサギ		9	
ツグミ	9		
ツバメ			7
モズ	1	4	1
オオソシキリ			5
合計種数	6	4	8

低地 (0.8~0.3km)

種名	種数	種数	種数	種数
カワウ	4	350	2	26
カシラサギ	46		6	16
キツネ	9	7	6	18
ハシロガサ	2		3	4
シヨウワウツバメ			11	10
コサギ		9		1
ツグミ	9			1
ツバメ			7	1
モズ	1	4	1	2
オオソシキリ			5	5
合計種数	6	4	8	4

高地 (0.2~10.2km)

種名	種数	種数	種数	種数
カワウ	4	350	2	26
カシラサギ	46		6	16
キツネ	9	7	6	18
ハシロガサ	2		3	4
シヨウワウツバメ			11	10
コサギ		9		1
ツグミ	9			1
ツバメ			7	1
モズ	1	4	1	2
オオソシキリ			5	5
合計種数	6	4	8	4

※枠内の数値は種数を示す
○:観察数以上10種を示した

【凡例】

- 直轄管理区間
- 距離標
- 流れの向き
- 護岸
- 水制工
- 横断構造物
- 樋門

(曲造物種別)
 ① (普通護岸) ② (堰水護岸)
 ③ (崩壊護岸) ④ (半壊護岸)
 ⑤ (不明、その他)
 ⑥ (堤、築港工)

【凡例】

直轄管理区間

【河川水辺の国勢調査地点】

- 魚介類
- 底生動物
- 植物相
- 植生(コト)地点
- 鳥類
- 小動物
- 陸上昆虫類

この区間で報告されている調査地点

8.8~10.6km

魚介類: アカザ、アユ、ウツセミガサ、カワウソノホリ、ギンズナ、ズナガニゴイ、スナヤツメ、タモロコ、ドジョウ、ナマス、ビリマス、モツコ

底生動物: コシダカヒメモノアラガイ、ヌマエビ、マシジミ、モノアラガイ

植物相: タコノアシ

鳥類: アオサ、イカルチドリ、オオソシキリ、カワウ、カワセミ、コアジサシ、コシノガサガサ、コジュケイ、コチドリ、シメ、セッカ、タビバリ、チュウヒ、ハヤブサ、ベニマシコ、シヤマホオジロ

小動物: トノサマガエル、シュレーゲルアオガエル

陸上昆虫類: カワラバク、カンタン、シオヤブ、セグロアシナガバチ、ヒラタケガタ、モンズメバチ、ヨコナガバチ

新幹線野洲川橋梁

カワセミ

チュウヒ

環境区分凡例(野洲川)

環境区分	種別	主な植物	凡例
河川	瀬川	ツルシシ、ササ、シロバナ、ウキクサ、クサキ、クサヤ、クサヤ、クサヤ	青
	急流	ツルシシ、ササ、シロバナ、ウキクサ、クサキ、クサヤ、クサヤ、クサヤ	黄
	静水	ツルシシ、ササ、シロバナ、ウキクサ、クサキ、クサヤ、クサヤ、クサヤ	赤
	滞水	ツルシシ、ササ、シロバナ、ウキクサ、クサキ、クサヤ、クサヤ、クサヤ	黒
陸地	河川敷	ツルシシ、ササ、シロバナ、ウキクサ、クサキ、クサヤ、クサヤ、クサヤ	緑
	河川沿	ツルシシ、ササ、シロバナ、ウキクサ、クサキ、クサヤ、クサヤ、クサヤ	白
その他	河川敷	ツルシシ、ササ、シロバナ、ウキクサ、クサキ、クサヤ、クサヤ、クサヤ	紫
	河川沿	ツルシシ、ササ、シロバナ、ウキクサ、クサキ、クサヤ、クサヤ、クサヤ	黒

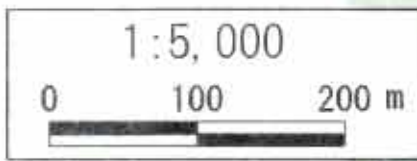


図 野洲川河川環境情報図(区間図) -6/8

1. 1 瀬田川の特徴

(1) 河川全般の特徴

(調査対象地)

瀬田川は琵琶湖からの唯一の流出河川で、滋賀県大津市瀬田町の琵琶湖南端に水源を発し、宮川、盛越川、三田川等の支川を合わせ大津市内を南下し、天ヶ瀬ダム湖に流入する。

このうち、河川水辺総括資料の作成を行う調査対象地（過去の河川水辺国勢調査の全調査範囲）は、琵琶湖工事事務所直轄管理区間を含む瀬田川最上流部（75km）から鹿跳橋付近（66.8km）までの区間である。

(河川環境を特徴づける主たる要因)

調査対象地は、上流部ほど河道幅が広く（100～190m）河床勾配が緩く（約1/6000）になっており、下流部ほど河道幅が狭小（70～100m）で河床勾配が急に（最下流部は約1/130）になっている。また、河川周辺は上流部では市街地が広がり下流部は山付けとなるなど、通常の河川とは上下流が逆の様相を呈している。

瀬田川では、下流域の治水・利水対策のため、70km付近に洗堰が設置され、琵琶湖の水位及び下流側への流量の調整が行われている。このため、堰の上流側は洪水時以外はほとんど流れのない湛水区間となり、下流側は堰の操作により流量及び水位が変動する区間となっている。

(河川環境の主たる特徴)

調査対象地の河川環境は、大きくは、70km付近の洗堰を境に湛水区域である上流側と、洗堰の操作により水域環境が左右される下流側の区間に分けられることが大きな特徴である。

洗堰より上流側は、一様に人工護岸が整備された掘込河道の様相を呈しており、植物の生育基盤が極めて少ないため概して植生は貧弱となっている。その中で、概ね72km地点付近より上流側を中心に、堆積土砂の上に成立したヨシ、マコモ等の抽水植物群落やヤナギ等の水辺の植生が点在して見られる。

下流側の区間では、洗堰から68.4km地点付近にかけては、河床勾配が比較的緩く（約1/2000～1/330）、上流側と同様に植生に乏しい掘込み河道の様相を呈するが、大戸川合流部に砂州が形成されオギ群落等のまとまった乾性草地在り見られる。68.4km地点付近より下流側では河床勾配が急となり（約1/130）、山付けで基盤に岩石が露出した溪流の様相を呈しており、河川植生自体は豊かではないが、周辺山林の環境と相まって、調査対象地においては比較的動物相が豊かな区間となっている。

(河川環境の類型)

以上を踏まえると、調査対象地の河川環境は、大きく、以下の4つの類型に区分することができ、10kmに満たない調査対象地の区間の中で、これらの類型に応じた河川環境及び生物の生息状況を確認することができる。



区間①：瀬田川唐橋付近（75～72km） 区間②：瀬田川洗堰上流（72～70km） 区間③：瀬田川洗堰下流（70～68.4km） 区間④：鹿跳橋付近（68.4～66.8km）

(2) 動植物の生息・生育状況

○植物の生育状況

区間①②では河川区域内に陸域が少ないため、全般に植生が貧弱であり、水際線は概ね人工護岸化されていることから、ヨシ群落やオギ群落等の水辺の植生は概して貧弱であるが、区間①では、一部に土砂が堆積し水辺の植生が生育している箇所が点在して見られる。

区間③では大戸川合流部から下流側には砂礫が堆積し、植生が成立する基盤がまとまって形成されている。洗堰による水量調節の影響を受けて水位が変動する頻度が少ないため、やや乾燥化しオギ群落が成立しているが、出水時に攪乱を受けやすいため一部にタコノアシ等も生育している。

区間④は、山付け区間であり基盤の岩が露出した部分も多いことから、水辺の植生はやや貧弱であるが、砂礫が堆積している部分にはツルヨシ群落のような一般に河川中上流域に特徴的な植生も見られる。

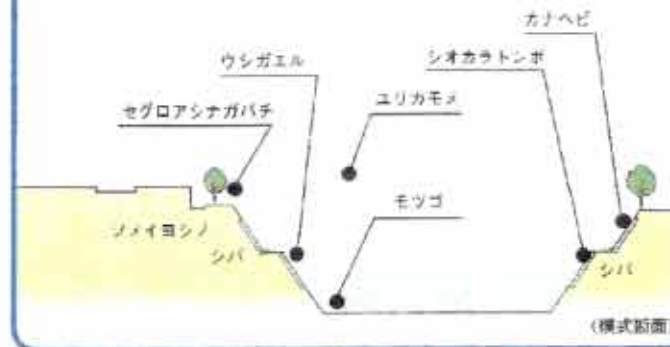
○動物の生息状況

区間①～②は、止水的な環境であり、琵琶湖と一体的なものであることから、魚類や底生動物はニゴロブナやヒメタニシ、マシジミといった種がみられ、鳥類ではカンムリカイツブリやカワウのような止水域を好む種がみられることが特徴である。しかし、ほ乳類や昆虫類は虫類等の陸域の動物については、陸域面積が狭く植生も貧弱であることから、スズメ等の都市部でもみられる種が中心であり、生息種も極端に少なくなっている。

区間③～④では、水域は流水環境となるため、魚類、底生動物もオイカワやシマトビケラ類等の流水域を好むものが主体となり、鳥類についてもヤマセミのような渓流域に特徴的な種もみられる。その他の動物については、区間③では、河川区域内に陸域や樹林が少ないものの、堤内地は農地であるため、区間①や②に比較すると生息種数はやや多くなっているものと考えられる。区間④については、山付け部で斜面林が一体的に存在することから、概して動物相は豊かになっており、特に昆虫類やほ乳類、鳥類に森林性の種が多く混じることが特徴となっている。

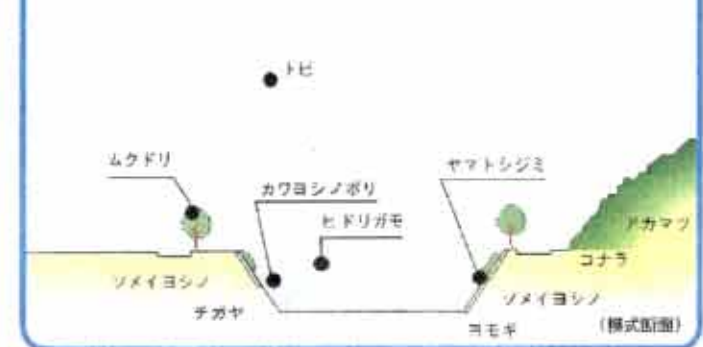
1 瀬田唐橋付近

両岸に草地があり、堤防上にサクラ等が植栽されているが、駐車場等人工裸地が多く、植生は貧弱である。水域は、洪水時以外はほとんど流れがなく、底質は砂や泥分が多い。



2 瀬田川洗堰上流

岸辺はコンクリート護岸が連続するが、堆積した土砂上や水辺に植生が成立し、ヨシ、マコモなどがみられる。水域は、洗堰の上流部のためほとんど流れはなく、底質は砂や泥分が多い。



3 瀬田川洗堰下流

両岸ともにコンクリート護岸であるが、草地や植栽帯もみられる明るく開けた環境となっている。水域は、早瀬、平瀬、淵など多様性に富むが、洗堰の放流量に左右される。底質は小礫が主体である。



4 鹿跳橋付近

岩盤が露出し植生は貧弱であるが、堆積した土砂上に植生が成立し、その背後の山腹にかけて落葉広葉樹などの樹林が連続している。水域は、流速が早く、水深は深い。一部に淵やワンドもみられる。





陸域	樹林	ヤナギ林	広葉樹林	針葉樹林	竹林
草地	湿性草地				
	乾性草地				
その他	公園等				
	自然裸地				
水域	流水域	瀬			
		淵			
	その他流水域				
止水域	ワンド・たまり				
	返水部				

	直轄管理区間
	図面境界線
	距離標
	遊歩
	樋門・樋管
	河川横断構造物
	人工構造物
	河川水辺の国勢調査調査地点
	小動物調査地点
	魚類調査地点
	底生動物調査地点
	陸上昆虫類調査地点
	河川水辺の国勢調査鳥類確認地点
	水面の鳥
	水辺の鳥
	樹林の鳥
	草地の鳥
	猛禽類
	その他の鳥

瀬田川大橋下流 (72.8~73.5km 左岸)			
調査実施日	96.7.30~8.2	96.11.27~30	96.2.17~2
両生類	ウシガエル	●	
爬虫類	カナヘビ	●	
哺乳類	モグラ属の一種	●	●
種数合計		3	0

唐橋 (73.9~74.1km 右岸)			
調査実施日	96.7.30~8.2	96.11.27~30	96.2.17~2
種数合計		0	0

唐橋 (73.8~74.2km)					
調査実施日	97.6.18~20	97.8.25~27	97.10.7~9	98.3.5~7	年間合計
主な確認種	コウライモロコ ブルーギル ブラックバス	コウライモロコ ブルーギル ブラックバス	コウライモロコ ブルーギル ブラックバス	ブルーギル ブラックバス	
種数合計	8	5	6	6	11
個体数合計	158	120	93	58	429

区間2 74.0~73.1km付近

植生環境 陸域が少なく、植生も全体に少ないが、73.6kmより下流の左岸ではヨシ群落やジャヤナギ群落など水辺に生育する植生がある程度まとまってみられる。また、ネジレモ、イトモなど琵琶湖でよくみられる水生植物も確認されている。

陸域環境 この区間は陸域自体が少なく、左岸のヤナギ林が多少生物の生息環境となっている可能性があるのみである。小動物の結果も、哺乳類はモグラ属の一種、爬虫類はカナヘビのみであり、陸域環境としてはかなり貧弱であることが伺われる。

水域環境 区間全域が湛水域であり、そこに生息する種は、湛水域を反映した種となっている。また、琵琶湖からこの区間までは、横断構造物がないため、ナリタヨコエビなどの琵琶湖固有種である底生動物が確認されている。

この区間で報告されている貴重な生物 74.0~73.1

(植物) ドクゼリ、ネジレモ、イトモ、トチカガミ

(鳥類) カワウ、チュウサギ、トモエガモ、ヨシガモ、タグリ、カワセミ

(陸上昆虫類) セグロアシナガバチ、ヒメスズメバチ、シオヤアブ、ヒメクロイラガ

(底生動物) ゲンジボタル

*平成9~12年度の河川水辺結果による。

瀬田川大橋 (73.5~75.0km 左岸)						
調査実施日	98.5.18~19	98.6.1~2	98.10.6~7	98.12.17~18	99.2.2~4	年間合計
主な確認種	スズメ トビ ツバメ	スズメ ムクドリ ツバメ	ハクセキレイ バン アオサギ スズメ	ヨリカモメ スズメ ヒドリガモ	ヨリカモメ スズメ カワウ	
種数合計	16	16	11	21	19	3
個体数合計	76	114	182	799	809	197

南瀬田川上流 (70.0~73.5km 左岸)						
調査実施日	98.5.18~19	98.6.1~2	98.10.6~7	98.12.17~18	99.2.2~4	年間合計
主な確認種	スズメ トビ カイツブリ	スズメ トビ ムクドリ	トビ トビ ハシブトガラス	ヨリカモメ スズメ ヒドリガモ	ヨリカモメ ムクドリ スズメ	
種数合計	19	23	18	33	34	45
個体数合計	212	264	132	725	1270	260

名神高架橋下流 (72.5~73.5km 左岸)	
環境	主な生息種
水際部	ムシジイトンボ、モートンイトンボ、キトンボ チョウトンボ、エチゴシマトビケラ、コムラサキ
河川敷	ヤチスズ、ハラオカメコオロギ、オオヒラタシテムシ ホソケシマグソコガネ、オオフタオビドロバチ フタモンアシナガバチ、ヒメスズメバチ

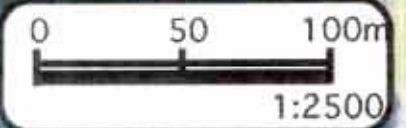
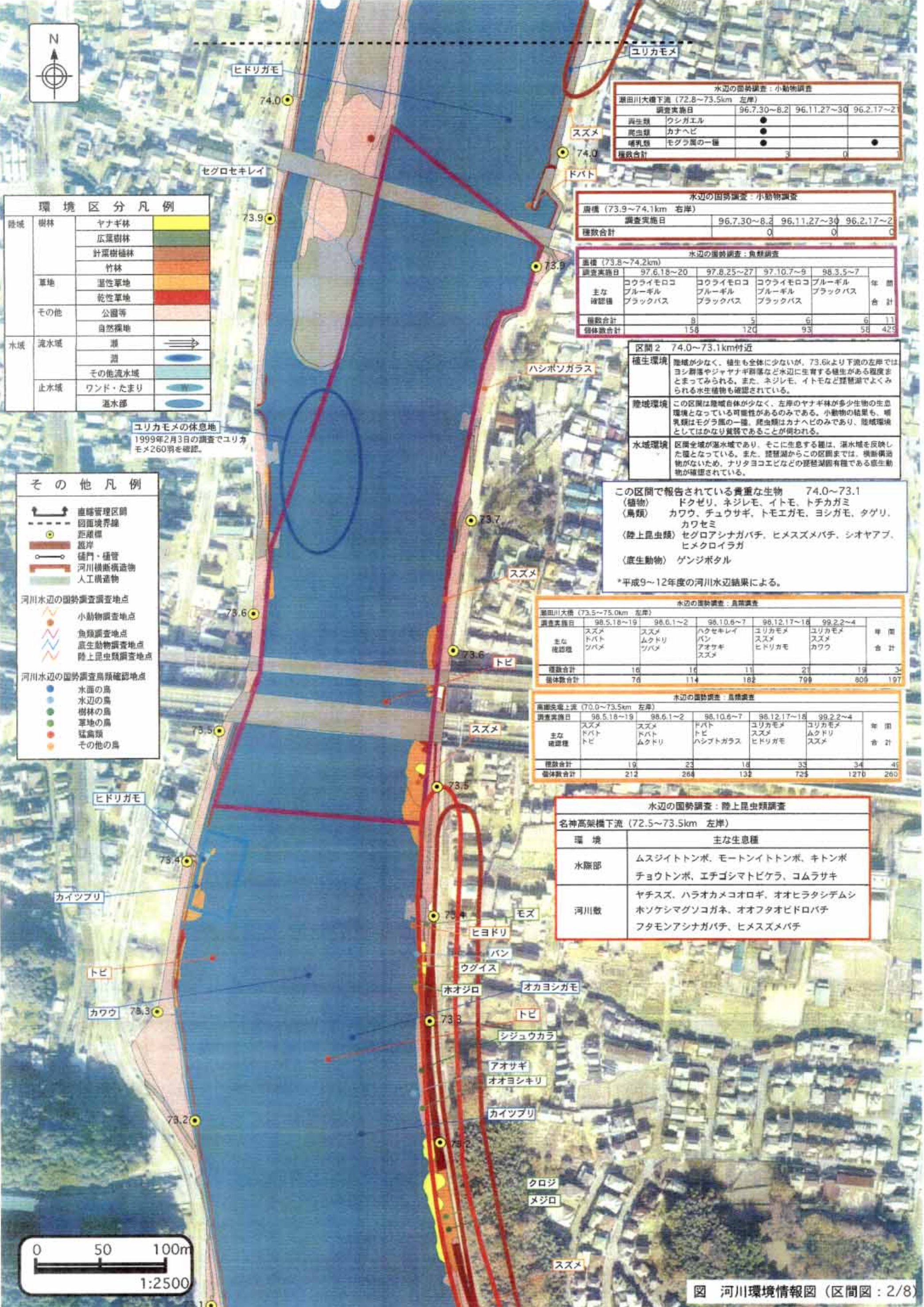
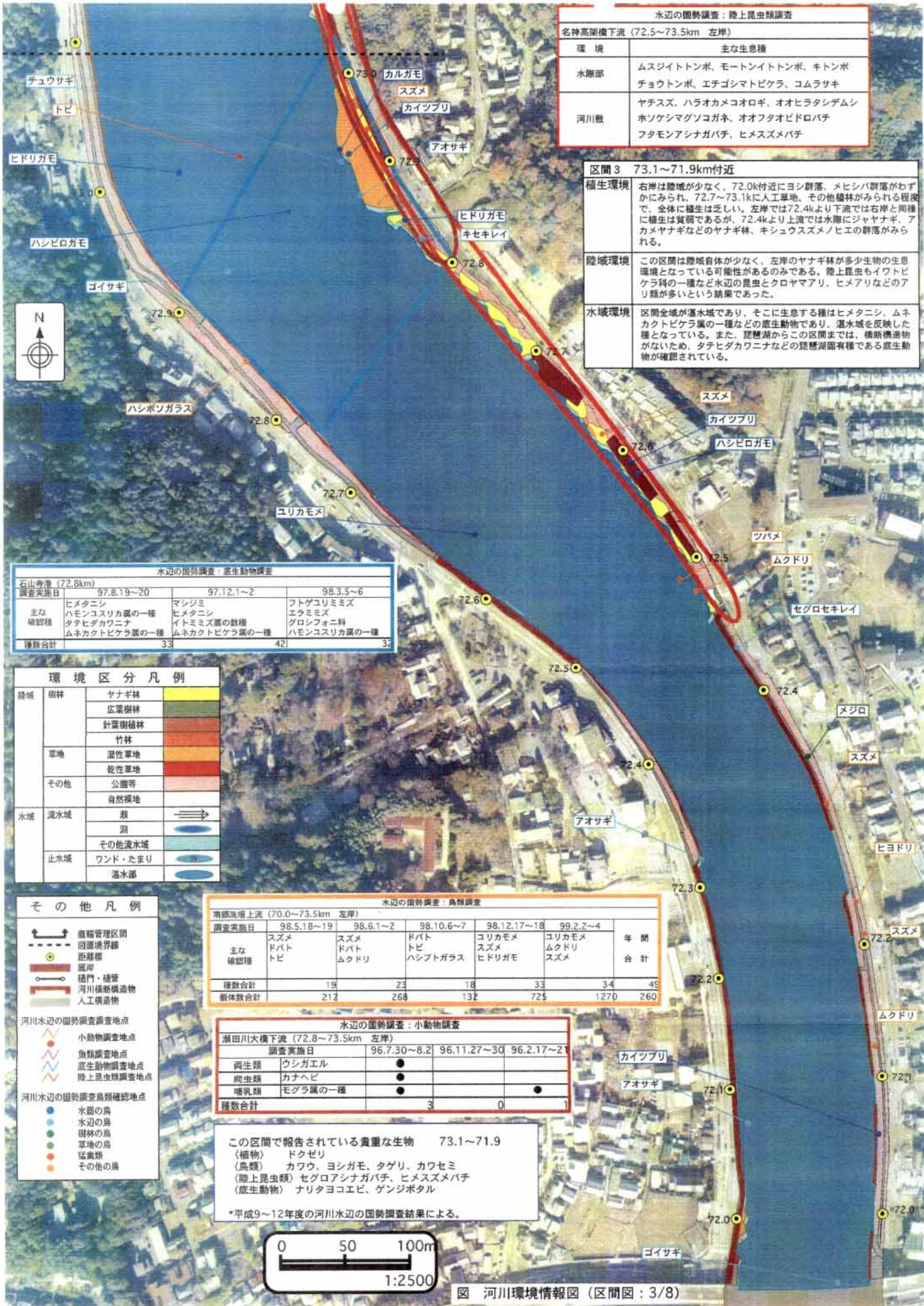


図 河川環境情報図 (区間図：2/8)



水辺の国勢調査：陸上昆虫類調査	
名神高架橋下流 (72.5~73.5km 左岸)	
環境	主な生息種
水際部	ムスジイトトンボ、モートンイトトンボ、キトンボ チョウトンボ、エチゴシマトビケラ、コムラサキ
河川敷	ヤチスズ、ハラオカメコオロギ、オオヒラタシデムシ ホソケシマグソコガネ、オオフトオビドロバチ フタモンアシナガバチ、ヒメスズメバチ

区間3 73.1~71.9km付近	
植生環境	右岸は陸域が少なく、72.0km付近にヨシ群落、メヒシバ群落がわずかにみられ、72.7~73.1kmに人工草地、その他植林がみられる程度で、全体に植生は乏しい。左岸では72.4kmより下流では右岸と同様に植生は貧弱であるが、72.4kmより上流では水際にジャヤナギ、アカメヤナギなどのヤナギ林、キシウスズメノヒエの群落がみられる。
陸域環境	この区間は陸域自体が少なく、左岸のヤナギ林が多少生物の生息環境となっている可能性があるのみである。陸上昆虫もイワトビケラ科の一種など水辺の昆虫とクロヤマアリ、ヒメアリなどのアリ類が多いという結果であった。
水域環境	区間全域が湛水域であり、そこに生息する種はヒメタニシ、ムネカクトビケラ属の一種などの底生動物であり、湛水域を反映した種となっている。また、琵琶湖からこの区間までは、横断構造物がないため、タテヒダカワニナなどの琵琶湖固有種である底生動物が確認されている。

水辺の国勢調査：底生動物調査			
石山寺港 (72.8km)			
調査実施日	97.8.19~20	97.12.1~2	98.3.5~6
主な確認種	ヒメタニシ ハモンユスリカ属の一種 タテヒダカワニナ ムネカクトビケラ属の一種	マシジミ ヒメタニシ イトミミズ属の数種 ムネカクトビケラ属の一種	フトゲユリミミズ エラミミズ グロシフォニ科 ハモンユスリカ属の一種
種数合計	33	42	32

環境区分凡例			
陸域	樹林	ヤナギ林	
		広葉樹林	
		針葉樹植林	
		竹林	
	草地	湿性草地	
		乾性草地	
	その他	公園等	
水域	流水域	瀬	
		淵	
		その他流水域	
	止水域	ワンド・たまり	
		湛水域	

その他凡例	
	直轄管理区間
	図面境界線
	距離標
	崖岸
	橋門・橋管
	河川横断構造物
	人工構造物
	河川水辺の国勢調査調査地点
	小動物調査地点
	魚類調査地点
	底生動物調査地点
	陸上昆虫類調査地点
	河川水辺の国勢調査鳥類確認地点
	水面の鳥
	水辺の鳥
	樹林の鳥
	草地の鳥
	猛禽類
	その他の鳥

水辺の国勢調査：鳥類調査						
南郷洗堰上流 (70.0~73.5km 左岸)						
調査実施日	98.5.18~19	98.6.1~2	98.10.6~7	98.12.17~18	99.2.2~4	年間合計
主な確認種	スズメ ドバト トビ	スズメ ドバト ムクドリ	ドバト トビ ハシブトガラス	ユリカモメ スズメ ヒドリガモ	ユリカモメ ムクドリ スズメ	
種数合計	19	23	18	33	34	49
個体数合計	212	268	132	725	1270	2607

水辺の国勢調査：小動物調査			
瀬田川大橋下流 (72.8~73.5km 左岸)			
調査実施日	96.7.30~8.2	96.11.27~30	96.2.17~21
両生類	ウシガエル	●	
爬虫類	カナヘビ	●	
哺乳類	モグラ属の一種	●	●
種数合計		3	1

この区間で報告されている貴重な生物 73.1~71.9
 (植物) ドクゼリ
 (鳥類) カワウ、ヨシガモ、タゲリ、カワセミ
 (陸上昆虫類) セグロアシナガバチ、ヒメスズメバチ
 (底生動物) ナリタヨコエビ、ゲンジボタル

*平成9~12年度の河川水辺の国勢調査結果による。

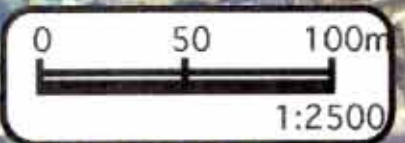


図 河川環境情報図 (区間図: 3/8)



この区間で報告されている貴重な生物 71.9~71.0
 (植物) ドクゼリ
 (鳥類) カンムリカイツブリ、カワウ、ヨシガモ、
 タゲリ、カワセミ
 (底生動物) ゲンジボタル
 *平成9~12年度の河川水辺の国勢調査結果による。

陸域	樹林	ヤナギ林		
		広葉樹林		
		針葉樹林		
		竹林		
	草地	湿性草地		
		乾性草地		
	その他	公園等		
		自然裸地		
		流水域	瀬	
			淵	
水域	その他流水域			
	止水域	ワンド・たまり		
		湛水部		

	直轄管理区間
	図面境界線
	距離標
	護岸
	樋門・橋管
	河川横断構造物
	人工構造物
河川水辺の国勢調査調査地点	
	小動物調査地点
	魚類調査地点
	底生動物調査地点
	陸上昆虫類調査地点
河川水辺の国勢調査鳥類確認地点	
	水面の鳥
	水辺の鳥
	樹林の鳥
	草地の鳥
	猛禽類
	その他の鳥

河川名称	調査実施日	主な確認種	個体数
赤野洗堀上流 (70.0~73.5km 左岸)	98.5.18~19	スズメ、ドバト、トビ	19
	98.6.1~2	スズメ、ドバト、ムクドリ	23
	98.10.6~7	ドバト、トビ、ハシブトガラス	18
	98.12.17~18	ユリカモメ、スズメ、ヒドリガモ	33
	99.2.2~4	ユリカモメ、ムクドリ、スズメ	34
年間合計			45
個体数合計			212
			268
			132
			729
			1270
			260

区間 4 71.9~71.0km付近

植生環境 この区間も陸域が少なく、全体に植生は乏しいが、右岸ではやや水際部がやや浅くなっている場所があるためか、抽水植物であるヨシ群落、マコモ群落がところどころでみられる。その他の植生としては、キシウスズメノヒエ、オギ群落などが点在している。左岸は、道路沿いに、サクラ類もしくはその他の樹林が続くのみである。

陸域環境 この区間は陸域自体が少なく、陸域環境と呼べる場所はほとんどない。左岸の樹林が多少生物の生息環境となっている可能性がある。水辺の鳥類を除くと、ドバト、スズメ、ムクドリ、ヒヨドリなどの市街地でも生息する鳥類が多い。

水域環境 区間全域が湛水域であり、そこに生息する種も湛水域を反映した種となっていると思われる。湛水域であり、ヒドリガモやヨシガモ、オカヨシガモなどのカモ類がみられるほか、浅い場所があるためか、アオサギ、コサギ、ササゴイなどのサギ類も多い。また、ユリカモメが多く確認されているが、これは広い湛水域であることと琵琶湖に近いと考えられる。

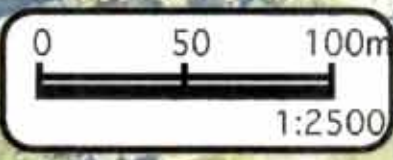
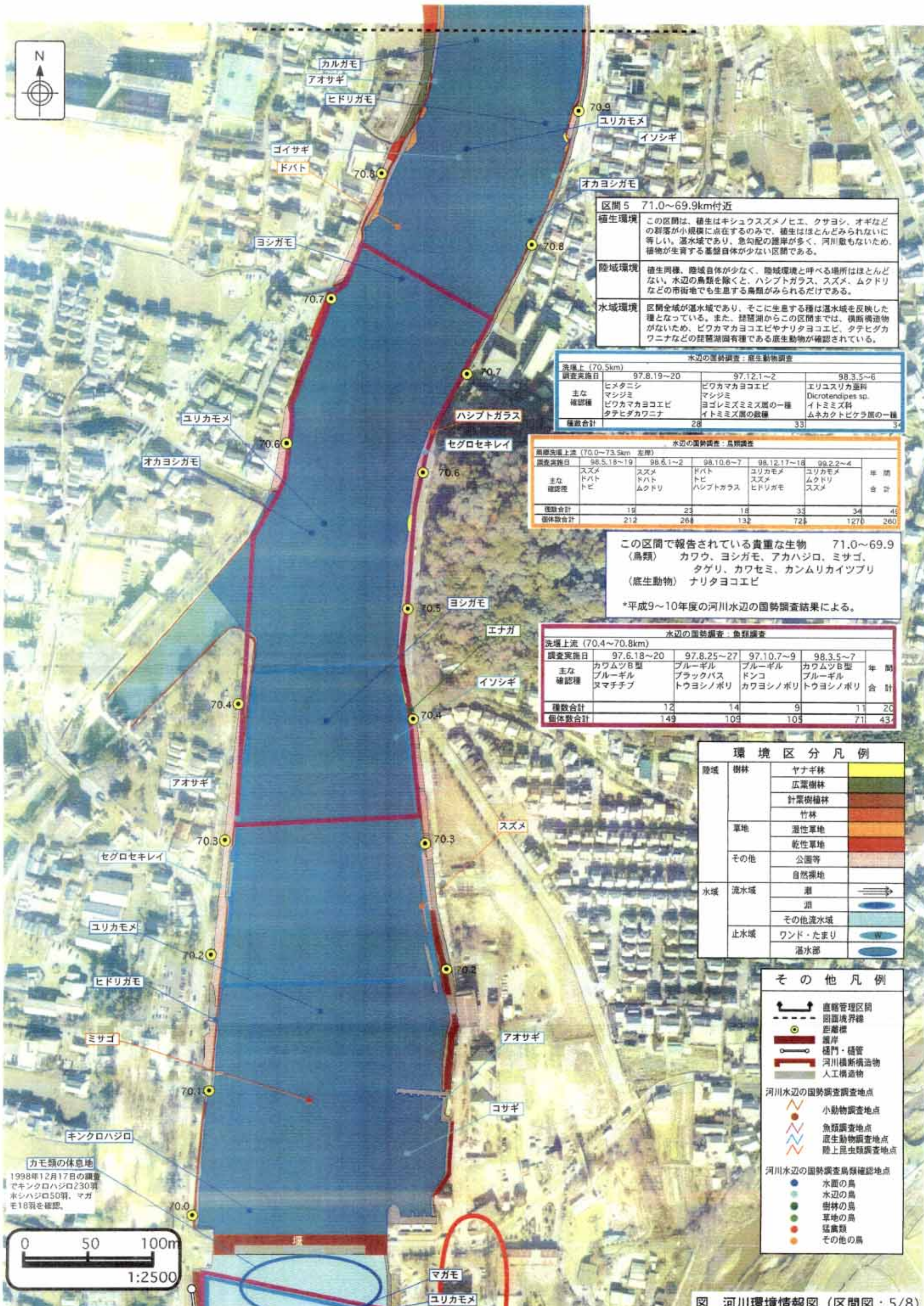


図 河川環境情報図 (区間図: 4/8)



区間 5 71.0~69.9km付近

植生環境 この区間は、植生はキシュスズメノヒエ、クサヨシ、オギなどの群落が小規模に点在するのみで、植生はほとんどみられないに等しい。湛水域であり、急勾配の護岸が多く、河川敷もないため、植物が生育する基盤自体が少ない区間である。

陸域環境 植生同様、陸域自体が少なく、陸域環境と呼べる場所はほとんどない。水辺の鳥類を除くと、ハシブトガラス、スズメ、ムクドリなどの市街地でも生息する鳥類のみみられるだけである。

水域環境 区間全域が湛水域であり、そこに生息する種は湛水域を反映した種となっている。また、琵琶湖からこの区間までは、横断構造物がないため、ビワカマコエビやナリタヨコエビ、タテヒダカワニナなどの琵琶湖固有種である底生動物が確認されている。

水辺の国勢調査：底生動物調査

洗堰上 (70.5km)	調査実施日	97.8.19~20	97.12.1~2	98.3.5~6
主な確認種		ヒメタニシ マシジミ ビワカマコエビ タテヒダカワニナ	ビワカマコエビ マシジミ ヨゴレミズミズ属の一種 イトミミズ属の数種	エリユスリカ蚤科 Dicrotendipes sp. イトミミズ科 ムネカクトビケラ属の一種
種数合計		28	18	33

水辺の国勢調査：鳥類調査

調査実施日	98.5.18~19	98.6.1~2	98.10.6~7	98.12.17~18	99.2.2~4	年間合計
主な確認種	スズメ ドバト トビ	スズメ ドバト ムクドリ	ドバト トビ ハシブトガラス	ユリカモメ スズメ ヒドリガモ	ユリカモメ ムクドリ スズメ	46
種数合計	19	23	18	33	34	127
個体数合計	212	264	132	725	1270	2603

この区間で報告されている貴重な生物 71.0~69.9
 (鳥類) カワウ、ヨシガモ、アカハジロ、ミサゴ、
 タゲリ、カワセミ、カンムリカイツブリ
 (底生動物) ナリタヨコエビ

*平成9~10年度の河川水辺の国勢調査結果による。

水辺の国勢調査：魚類調査

調査実施日	97.6.18~20	97.8.25~27	97.10.7~9	98.3.5~7	年間合計
主な確認種	カワムツB型 ブルーギル ヌマチチブ	ブルーギル ブラックバス トウヨシノボリ	ブルーギル ドンコ カワヨシノボリ	カワムツB型 ブルーギル トウヨシノボリ	20
種数合計	12	14	9	11	46
個体数合計	149	109	105	71	434

環境区分凡例

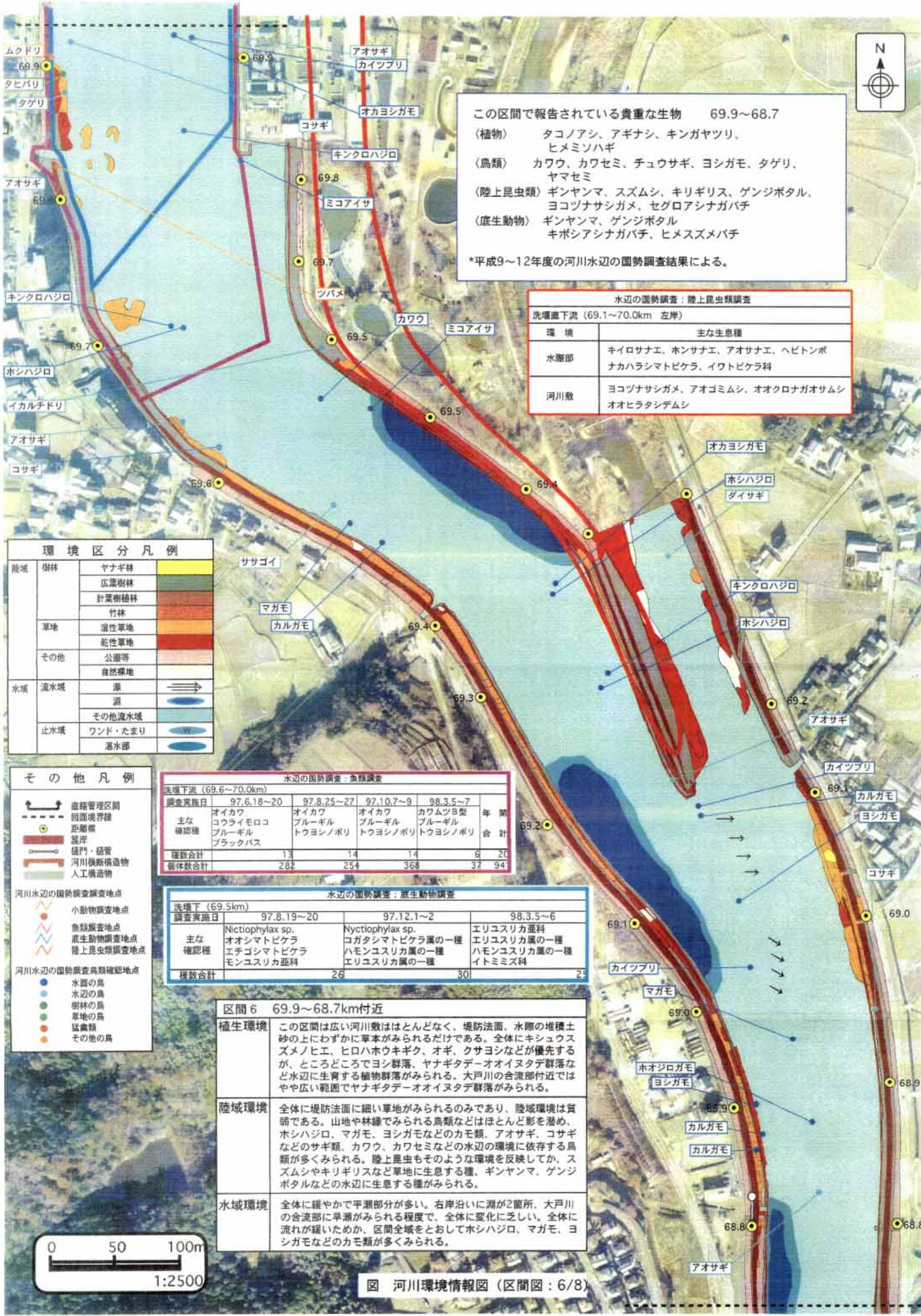
陸域	樹林	ヤナギ林	黄色
		広葉樹林	緑色
		針葉樹林	茶色
		竹林	茶色
草地	湿性草地	茶色	
	乾性草地	茶色	
その他	公園等	茶色	
	自然裸地	茶色	
水域	流水域	瀬	→
		淵	⇄
		その他流水域	⇄
	止水域	ワンド・たまり	W
	湛水域	⇄	

その他凡例

- 直轄管理区間
- 国境境界線
- 距離標
- 護岸
- 樋門・樋管
- 河川横断構造物
- 人工構造物
- 河川水辺の国勢調査調査地点
 - 小動物調査地点
 - 魚類調査地点
 - 底生動物調査地点
 - 陸上昆虫類調査地点
- 河川水辺の国勢調査鳥類確認地点
 - 水面の鳥
 - 水辺の鳥
 - 樹林の鳥
 - 草地の鳥
 - 猛禽類
 - その他の鳥

カモ類の休息地
 1998年12月17日の調査でキンクロハジロ230羽、ホシハジロ50羽、マガモ18羽を確認。

図 河川環境情報図 (区間図: 5/8)



この区間で報告されている貴重な生物 69.9~68.7

〈植物〉 タコノアシ、アギナシ、キングヤツリ、ヒメミソハギ

〈鳥類〉 カワウ、カワセミ、チュウサギ、ヨシガモ、タゲリ、ヤマセミ

〈陸上昆虫類〉 ギンヤンマ、スズムシ、キリギリス、ゲンジボタル、ヨコツナサシガメ、セグロアシナガバチ

〈底生動物〉 ギンヤンマ、ゲンジボタル、キボシアシナガバチ、ヒメスズメバチ

*平成9~12年度の河川水辺の国勢調査結果による。

水辺の国勢調査：陸上昆虫類調査	
洗堰直下流 (69.1~70.0km 左岸)	
環境	主な生息種
水源地	キイロサナエ、ホンサナエ、アオサナエ、ヘビトンボ、ナカハラシマトビケラ、イトビケラ科
河川敷	ヨコツナサシガメ、アオゴミムシ、オオクロナガオサムシ、オオヒラタシデムシ

陸域	樹林	ヤナギ林	
		広葉樹林	
		針葉樹林	
	草地	湿性草地	
		乾性草地	
	その他	公園等	
自然裸地			
水域	流水域	瀬	
		淵	
		その他流水域	
	止水域	ワンド・たまり	
		渇水部	

	自治管理区間
	図面境界線
	距離標
	護岸
	樋門・橋管
	河川横断構造物
	人工構造物
河川水辺の国勢調査調査地点	
	小動物調査地点
	魚類調査地点
	底生動物調査地点
	陸上昆虫類調査地点
河川水辺の国勢調査鳥類確認地点	
	水面の鳥
	水辺の鳥
	樹林の鳥
	草地の鳥
	猛禽類
	その他の鳥

洗堰下流 (69.6~70.0km)					
調査実施日	97.6.18~20	97.8.25~27	97.10.7~9	98.3.5~7	年間
主な確認種	オイカワ コウライモロコ ブルーギル ブラックバス	オイカワ ブルーギル トウヨシノボリ	オイカワ ブルーギル トウヨシノボリ	カワムツB型 ブルーギル トウヨシノボリ	年 合 計
種数合計	13	14	14	6	20
個体数合計	282	254	368	37	941

洗堰下 (69.5km)			
調査実施日	97.8.19~20	97.12.1~2	98.3.5~6
主な確認種	Nictiophylax sp. オオシマトビケラ エチゴシマトビケラ モンユスリカ亜科	Nyctiophylax sp. コガタシマトビケラ属の一種 ハモンユスリカ属の一種 エリユスリカ属の一種	エリユスリカ亜科 エリユスリカ属の一種 ハモンユスリカ属の一種 イトミミズ科
種数合計	26	30	25

区間 6 69.9~68.7km付近

植生環境 この区間は広い河川敷はほとんどなく、堤防法面、水際の堆積土砂の上にわずかに草本がみられるだけである。全体にキシュウスズメノヒエ、ヒロハホウキギク、オギ、クサヨシなどが優先するが、ところどころでヨシ群落、ヤナギタデ-オオイヌタデ群落など水辺に生育する植物群落がみられる。大戸川の合流部付近ではやや広い範囲でヤナギタデ-オオイヌタデ群落がみられる。

陸域環境 全体に堤防法面に細い草地がみられるのみであり、陸域環境は貧弱である。山地や林縁でみられる鳥類などはほとんど影を潜め、ホシハジロ、マガモ、ヨシガモなどのカモ類、アオサギ、コサギなどのサギ類、カワウ、カワセミなどの水辺の環境に依存する鳥類が多くみられる。陸上昆虫もそのような環境を反映してか、スズムシやキリギリスなど草地に生息する種、ギンヤンマ、ゲンジボタルなどの水辺に生息する種がみられる。

水域環境 全体に緩やかで平瀬部分が多い。右岸沿いに淵が2箇所、大戸川の合流部に早瀬がみられる程度で、全体に変化に乏しい。全体に流れが緩いためか、区間全域をとおしてホシハジロ、マガモ、ヨシガモなどのカモ類が多くみられる。

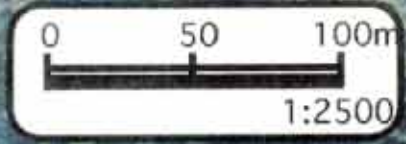


図 河川環境情報図 (区間図：6/8)

陸域	樹林	ヤナギ林	
		広葉樹林	
		針葉樹林	
		竹林	
草地	湿性草地		
	乾性草地		
その他	公園等		
	自然裸地		
水域	流水域	瀬	
		淵	
		その他流水域	
	止水域	ワンド・たまり	
		湛水部	

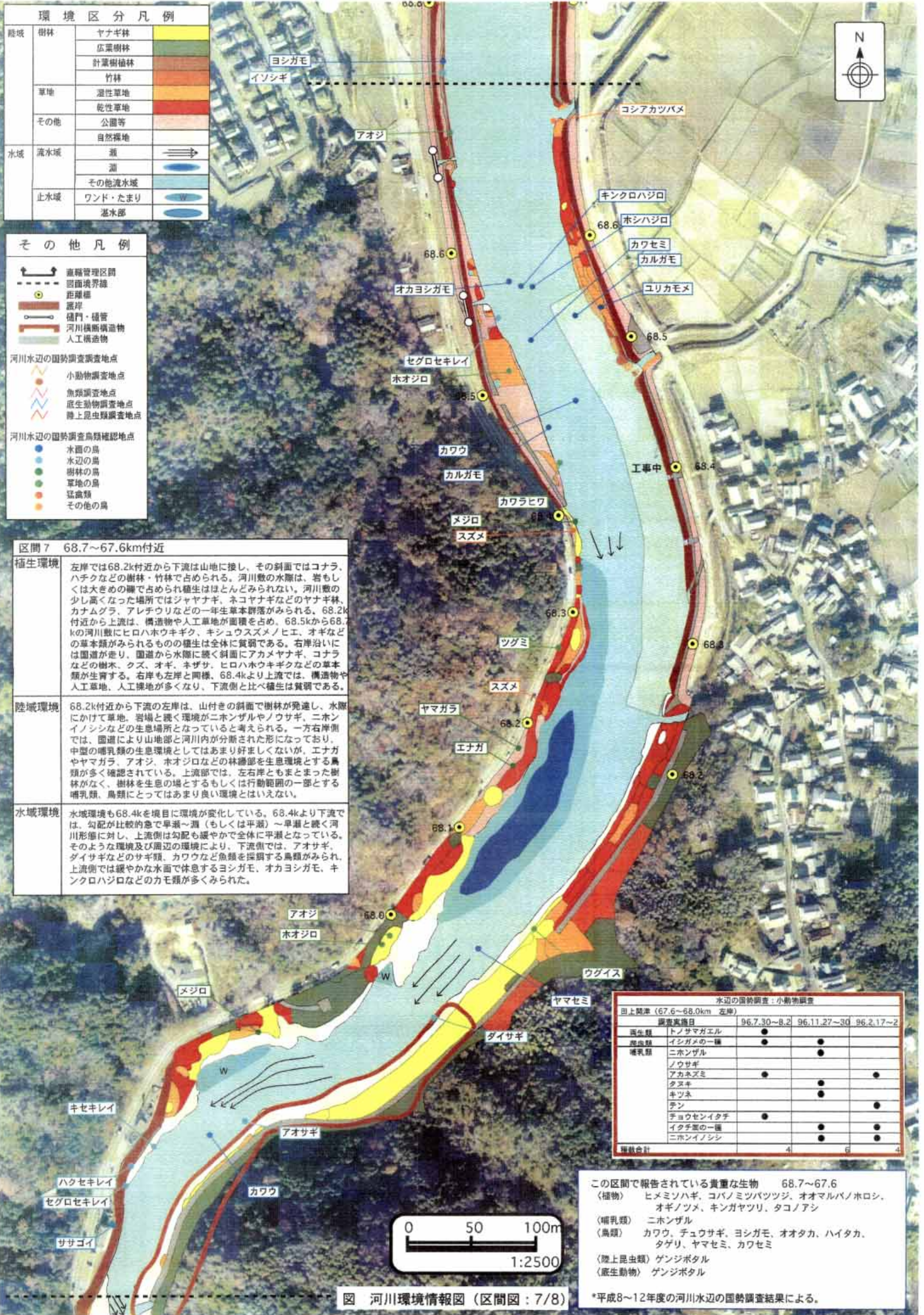
	直轄管理区間
	区間境界線
	距離標
	崖岸
	樋門・樋管
	河川横断構造物
	人工構造物
河川水辺の国勢調査調査地点	
	小動物調査地点
	魚類調査地点
	底生動物調査地点
	陸上昆虫調査地点
河川水辺の国勢調査鳥類確認地点	
	水面の鳥
	水辺の鳥
	樹林の鳥
	草地の鳥
	猛禽類
	その他の鳥

区間7 68.7~67.6km付近

植生環境 左岸では68.2km付近から下流は山地に接し、その斜面ではコナラ、ハチクなどの樹林・竹林で占められる。河川敷の水際は、岩もしくは大きめの礫で占められ植生はほとんどみられない。河川敷の少し高くなった場所ではジャナナギ、ネコヤナギなどのヤナギ林、カナムグラ、アレチウリなどの一年生草本群落が見られる。68.2km付近から上流は、構造物や人工草地在面積を占め、68.5kmから68.7kmの河川敷にヒロハホウキギク、キシウスズメノヒエ、オギなどの草本類が見られるものの植生は全体に貧弱である。右岸沿いには国道が走り、国道から水際に続く斜面にアカメヤナギ、コナラなどの樹木、クス、オギ、ネザサ、ヒロハホウキギクなどの草本類が生育する。右岸も左岸と同様、68.4kmより上流では、構造物や人工草地、人工裸地が多くなり、下流側と比べ植生は貧弱である。

陸域環境 68.2km付近から下流の左岸は、山付きの斜面で樹林が発達し、水際にかけて草地、岩場と続く環境がニホンザルやノウサギ、ニホンイノシシなどの生息場所となっていると考えられる。一方右岸側では、国道により山地部と河川内が分断された形になっており、中型の哺乳類の生息環境としてはあまり好ましくないが、エナガやヤマガラ、アオジ、ホオジロなどの林縁部を生息環境とする鳥類が多く確認されている。上流部では、左右岸ともまとまった樹林がなく、樹林を生息の場とするもしくは行動範囲の一部とする哺乳類、鳥類にとってはあまり良い環境とはいえない。

水域環境 水域環境も68.4kmを境目に環境が変化している。68.4kmより下流では、勾配が比較的急で早瀬～淵（もしくは平瀬）～早瀬と続く河川形態に対し、上流側は勾配も緩やかで全体に平瀬となっている。そのような環境及び周辺の環境により、下流側では、アオサギ、ダイサギなどのサギ類、カワウなど魚類を採餌する鳥類がみられ、上流側では緩やかな水面で休息するヨシガモ、オカヨシガモ、キンクロハジロなどのカモ類が多くみられた。

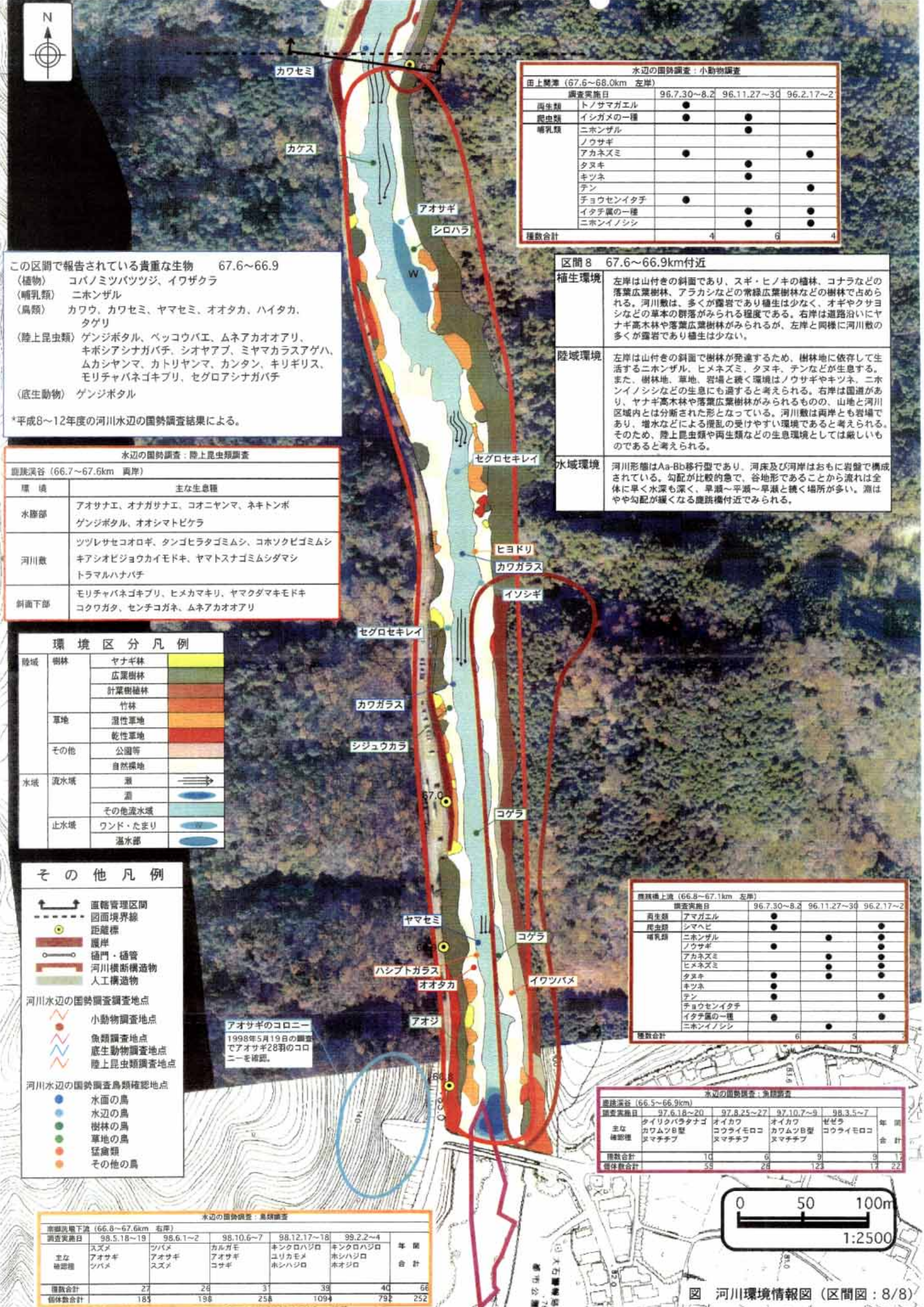


調査実施日	96.7.30~8.2	96.11.27~30	96.2.17~2
両生類	トノサマガエル	●	
爬虫類	イシガメの一種	●	
哺乳類	ニホンザル		●
	ノウサギ		●
	アカネズミ	●	
	タヌキ		●
	キツネ		●
テン			●
チョウセンイタチ	●		
イタチ亜種の一部		●	●
ニホンイノシシ		●	●
種数合計	4	6	4

この区間で報告されている貴重な生物 68.7~67.6
 〈植物〉 ヒメミソハギ、コバノミツバツツジ、オオマルバノホロシ、オギノツメ、キンガヤツリ、タコノアシ
 〈哺乳類〉 ニホンザル
 〈鳥類〉 カワウ、チュウサギ、ヨシガモ、オオタカ、ハイタカ、タゲリ、ヤマセミ、カワセミ
 〈陸上昆虫類〉 ゲンジボタル
 〈底生動物〉 ゲンジボタル

図 河川環境情報図 (区間図: 7/8)

*平成8~12年度の河川水辺の国勢調査結果による。



この区間で報告されている貴重な生物 67.6~66.9
 (植物) コバノミツバツツジ、イワザクラ
 (哺乳類) ニホンザル
 (鳥類) カワウ、カワセミ、ヤマセミ、オオタカ、ハイタカ、タグリ
 (陸上昆虫類) ゲンジボタル、ベッコウバエ、ムネアカオオアリ、キボシアシナガバチ、シオヤアブ、ミヤマカラスアゲハ、ムカシヤンマ、カトリヤンマ、カンタン、キリギリス、モリチャバネゴキブリ、セグロアシナガバチ
 (底生動物) ゲンジボタル

*平成8~12年度の河川水辺の国勢調査結果による。

田上間瀬 (67.6~68.0km 左岸)	調査実施日	96.7.30~8.2	96.11.27~30	96.2.17~2
両生類	トノサマガエル	●		
爬虫類	イシガメの一種	●		
哺乳類	ニホンザル		●	
	ノウサギ			●
	アカネズミ	●		●
	タヌキ		●	
	キツネ		●	
	テン			●
	チョウセンイタチ	●		
イタチ属の一種		●	●	
ニホンイノシシ		●	●	
種数合計		4	6	4

区間8 67.6~66.9km付近

植生環境
 左岸は山付きの斜面であり、スギ・ヒノキの植林、コナラなどの落葉広葉樹林、アラカシなどの常緑広葉樹林などの樹林で占められる。河川敷は、多くが露岩であり植生は少なく、オギやクサヨシなどの草本の群落のみみられる程度である。右岸は道路沿いにヤナギ高木林や落葉広葉樹林のみみられるが、左岸と同様に河川敷の多くが露岩であり植生は少ない。

陸域環境
 左岸は山付きの斜面で樹林が発達するため、樹林地に依存して生活するニホンザル、ヒメネズミ、タヌキ、テンなどが生息する。また、樹林地、草地、岩場と続く環境はノウサギやキツネ、ニホンイノシシなどの生息にも適すると考えられる。右岸は国道があり、ヤナギ高木林や落葉広葉樹林のみみられるもの、山地と河川区域内とは分断された形となっている。河川敷は両岸とも岩場であり、増水などによる攪乱の受けやすい環境であると考えられる。そのため、陸上昆虫類や両生類などの生息環境としては厳しいものであると考えられる。

水域環境
 河川形態はAa-Bb移行型であり、河床及び河岸はおもに岩盤で構成されている。勾配が比較的急で、谷地形であることから流れは全体に早く水深も深く、早瀬~平瀬~早瀬と続く場所が多い。淵はやや勾配が緩くなる鹿跳橋付近でみられる。

鹿跳橋下流 (66.7~67.6km 両岸)	
環境	主な生息種
水際部	アオサナエ、オナガサナエ、コオニヤンマ、ネキトンボ ゲンジボタル、オオシマトビケラ
河川敷	ツツレサセコオロギ、タンゴヒラタゴミムシ、コホソクビゴミムシ キアシオビジョウカイモドキ、ヤマトスナゴミムシダマシ トラマルハナバチ
斜面下部	モリチャバネゴキブリ、ヒメカマキリ、ヤマクダマキモドキ コクワガタ、センチコガネ、ムネアカオオアリ

陸域	樹林	ヤナギ林	■
		広葉樹林	■
		針葉樹林	■
	竹林	■	
草地	湿性草地	■	
	乾性草地	■	
その他	公園等	■	
	自然裸地	■	
水域	流水域	瀬	→
		淵	⇄
		その他流水域	■
	止水域	ワンド・たまり	■
	湛水域	■	

- その他凡例
- 直轄管理区間
 - 図面境界線
 - 距離標
 - 護岸
 - 樋門・樋管
 - 河川横断構造物
 - 人工構造物
- 河川水辺の国勢調査調査地点
- 小動物調査地点
 - 魚類調査地点
 - 底生動物調査地点
 - 陸上昆虫類調査地点
- 河川水辺の国勢調査鳥類確認地点
- 水面の鳥
 - 水辺の鳥
 - 樹林の鳥
 - 草地の鳥
 - 猛禽類
 - その他の鳥

アオサギのコロニー
 1998年5月19日の調査でアオサギ28羽のコロニーを確認。

調査実施日	96.7.30~8.2	96.11.27~30	96.2.17~2
両生類	アマガエル	●	
爬虫類	シマヘビ	●	●
哺乳類	ニホンザル		●
	ノウサギ	●	●
	アカネズミ	●	●
	ヒメネズミ	●	●
	タヌキ	●	●
	キツネ	●	●
	テン	●	●
	チョウセンイタチ	●	●
	イタチ属の一種	●	●
	ニホンイノシシ		●
種数合計		6	3

鹿跳橋下流 (66.5~66.9km)		調査実施日		97.6.18~20		97.8.25~27		97.10.7~9		98.3.5~7		年間合計
主な確認種		タイリクバラタナゴ	オイカワ	コウライモロコ	オイカワ	カワムツB型	コウライモロコ	カワムツB型	コウライモロコ	ママチブ	ママチブ	
種数合計		10	6	9	9	9	9	9	9	9	9	17
個体数合計		59	28	123	17	22						

南郷洗地下流 (66.8~67.6km 右岸)		調査実施日		98.5.18~19		98.6.1~2		98.10.6~7		98.12.17~18		99.2.2~4		年間合計
主な確認種		スズメ	ツバメ	アオサギ	スズメ	カルガモ	アオサギ	コサギ	キンクロハジロ	ユリカモメ	ホシハジロ	ホオジロ	ホシハジロ	
種数合計		27	26	31	39	40	66							
個体数合計		185	198	258	1094	792	252							

図 河川環境情報図 (区間図: 8/8)

浄化対象河川：
南湖中間水路

環境基準

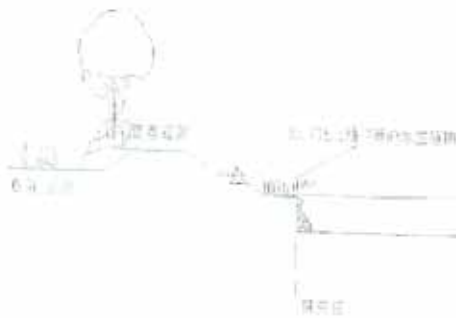
COD 1 mg/l
T-N 0.2 mg/l
T-P 0.01 mg/l

目標削減量：

COD 17.6 kg/day
T-N 6.8 kg/day
T-P 0.54 kg/day

中間水路水質 (mg/l)		
	H7	H12
COD	3.8	3.4
T-N	0.83	0.71
T-P	0.060	0.045

植生浄化イメージ図



地点名	草津川放水路河口部
	水生植物による浄化
事業内容	高水敷にヨシの植生浄化帯を創出し、栄養塩の除去と生態系の保全を行う。

地点名	排水施設前面
	水生植物による浄化
事業内容	樋門全面の河床を掘り下げワンド(沈降池)を設け、水生植物を植栽し浄化する

地点名	排水施設前面
	礫間接触による浄化
事業内容	樋門全面の河床を掘り下げワンド(沈降池)を設け、礫間接触浄化する

地点名	北川合流点
	沈殿池+土壌浸透法
事業内容	公園内に施設を設置し北川から滲水して浄化 沈殿池を設置しSS成分を除去後、土壌による栄養塩の除去を実施(吸着剤として赤玉土を用いる)

地点名	草津川放水路 中流部河道内
	水生植物による浄化
事業内容	自然の河床形状を人工的に創出し、多様な生態系を形成させる

琵琶湖

中間水路

草津川(放水路)

草津市

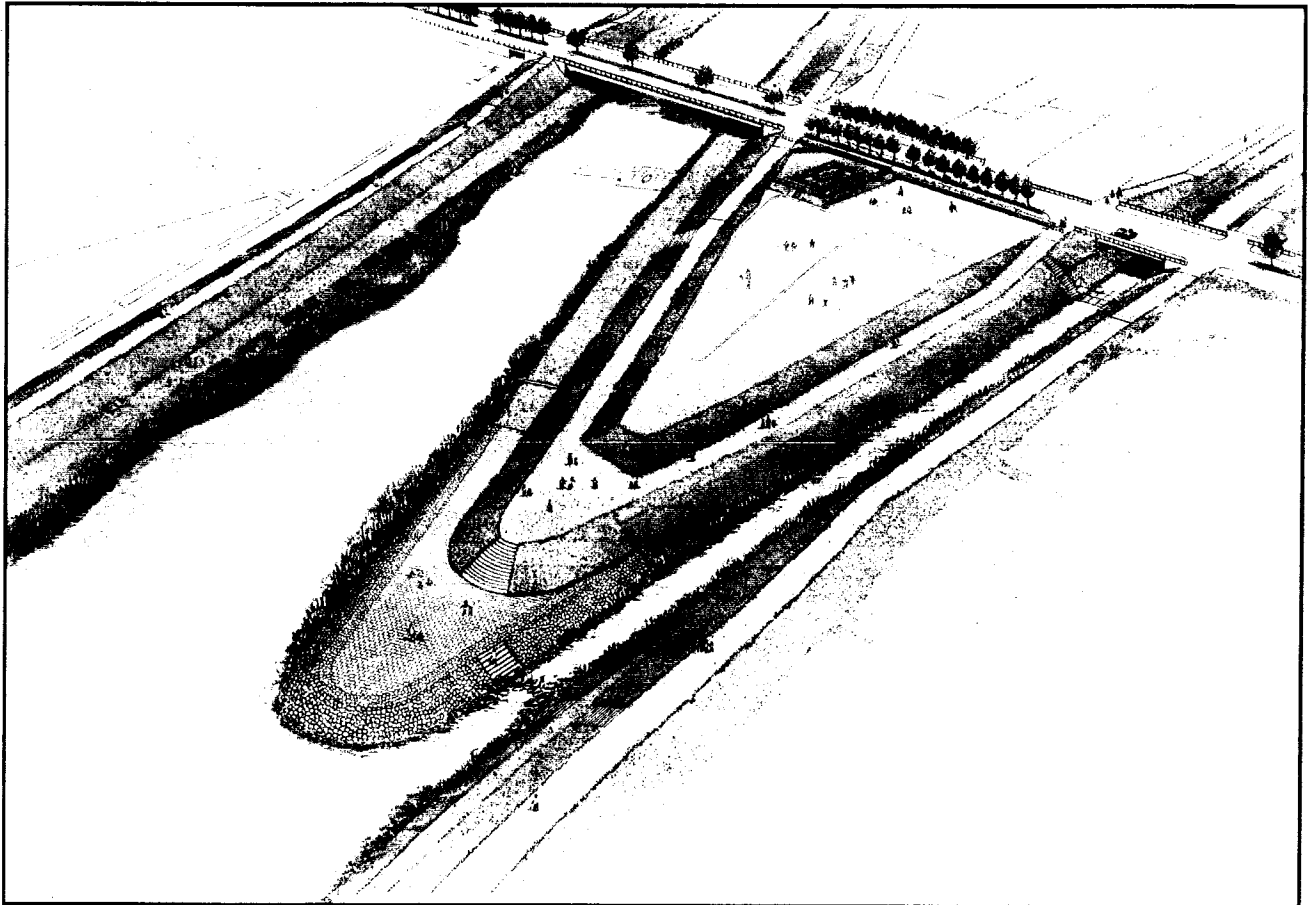
草津市



大津管理区

草津川放水路浄化事業

土壌浄化施設の概要

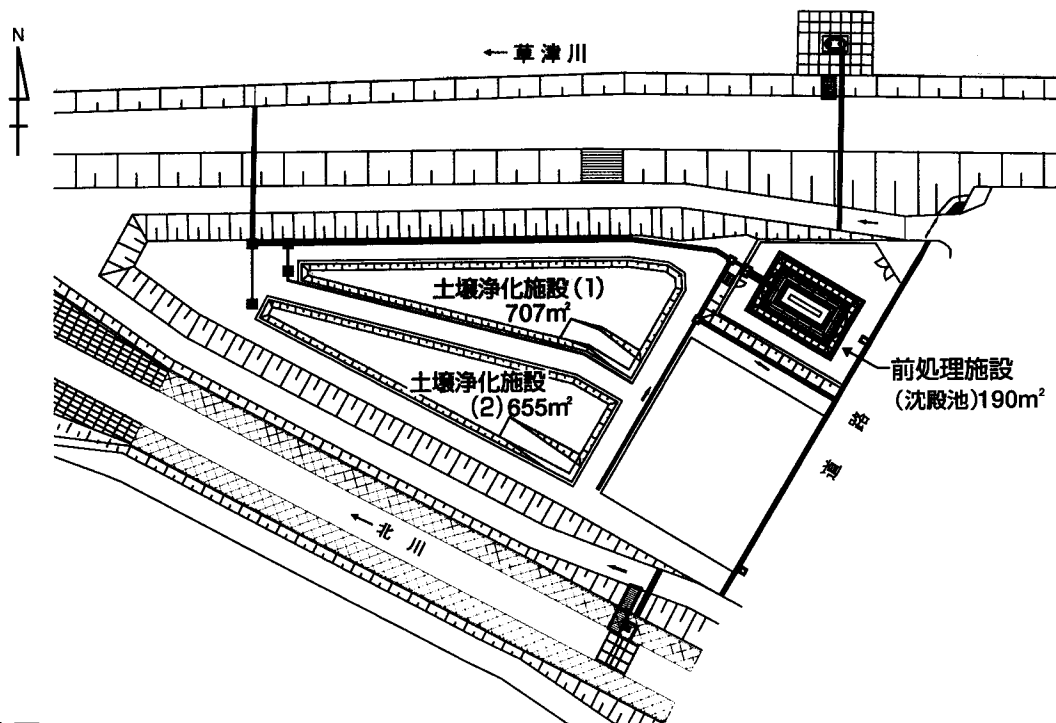


自然本来の力をいかし、 草津川の水をキレイにします。

本施設は、湖の富栄養化原因物質の1つであるリンを除去するものであり、前処理施設と土壌浄化施設があります。

- ① 北川から日量約2,160m³の取水が可能です。また、草津川からも取水することができます。
- ② 河川水は、まず前処理施設に通水し、浮遊物質(にがり分)を8mg/l以下に落としてから、土壌浄化施設へ送ります。
- ③ 土壌浄化施設では、送られてきた水を上向流方式で浄化しています。
- ④ 本施設では、65%以上のリン除去率が期待できます。

■ 施設全体平面図



■ 施設の諸元

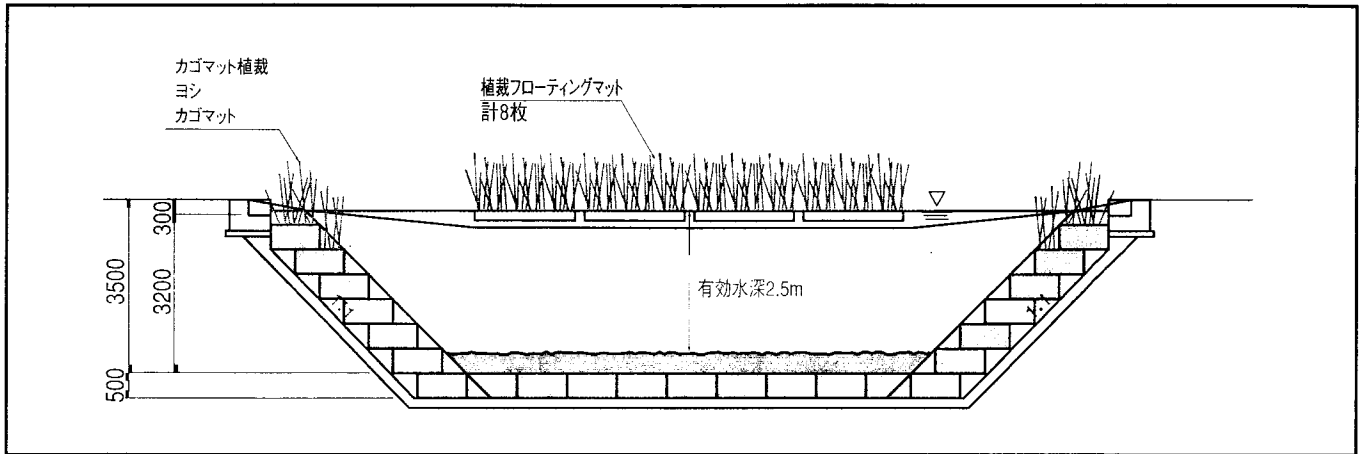
項目	諸元
施設面積	5,645m ²
規模	幅11m×長さ17.1m×深さ3.7m(有効水深2.5m) 水面積190m ² 、容積385m ³
前処理施設	
通水量	2160m ³ /日
滞留時間	1.3時間
水面積負荷	25m ³ /m ² 日
通水方法	横流方式
その他	ヨシ植栽(周囲法面・フローティングマット 2m×2m×8基)

項目	諸元
系列数	2池
規模	707m ² 、655m ² 深さ1.2m
通水量	2,160m ³ /日(2池)
水面積負荷	1.6m ³ /m ² ・日
通水方法	上向流方式
使用する材	赤玉土

周辺環境を考慮した施設構造

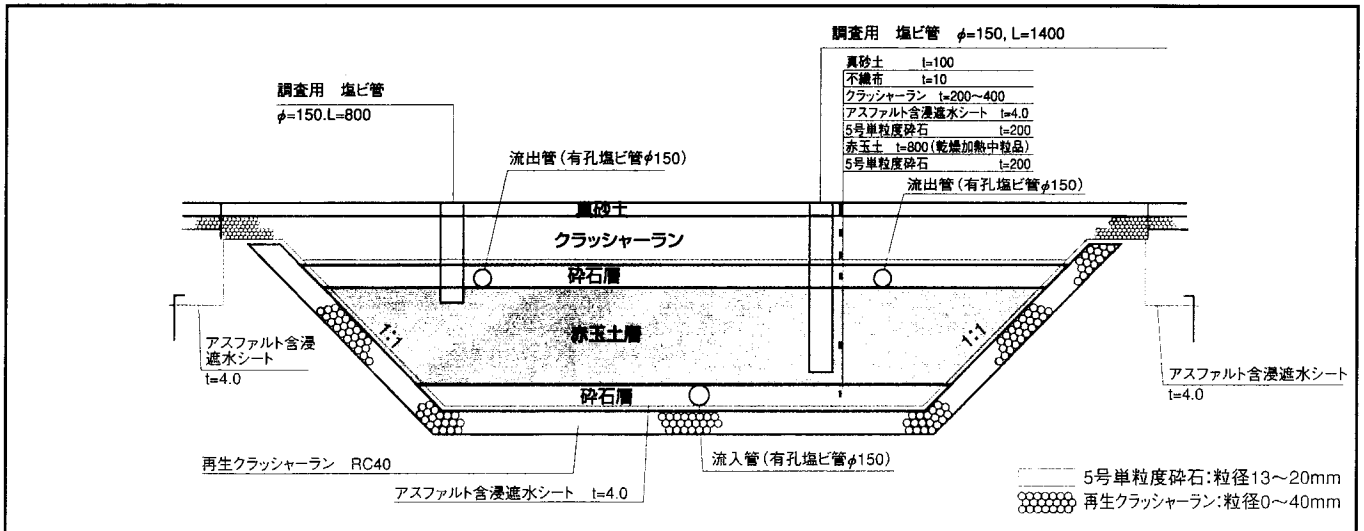
■ 前処理施設断面図

中央部には、ヨシ植栽フローティングマットを浮かべています。また、周囲にもヨシを植栽しています。

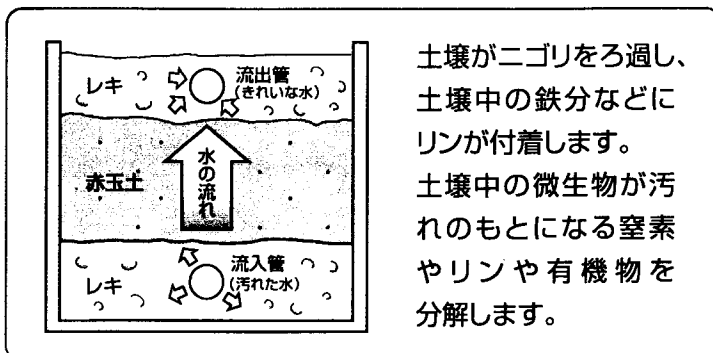


■ 土壌浄化施設断面図

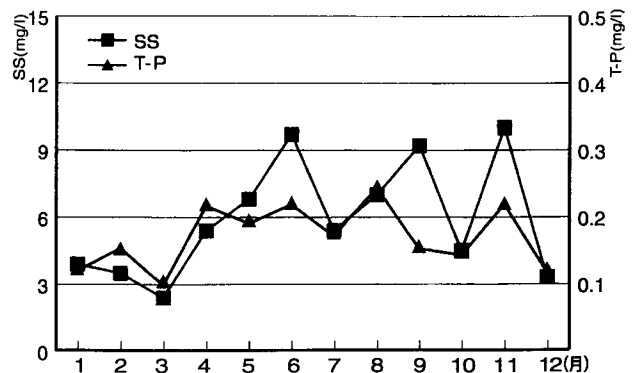
赤玉土層の厚さは800mmで、その上層・下層はそれぞれ200mmの碎石層になっています。また、下層には1本の流入管、上層には2本の流出管が設置されています。



■ 水質浄化のメカニズム (上向流方式)



■ 北川の水質: SS、T-P (2000年1月~12月)



■ 土壤浄化施設のご案内



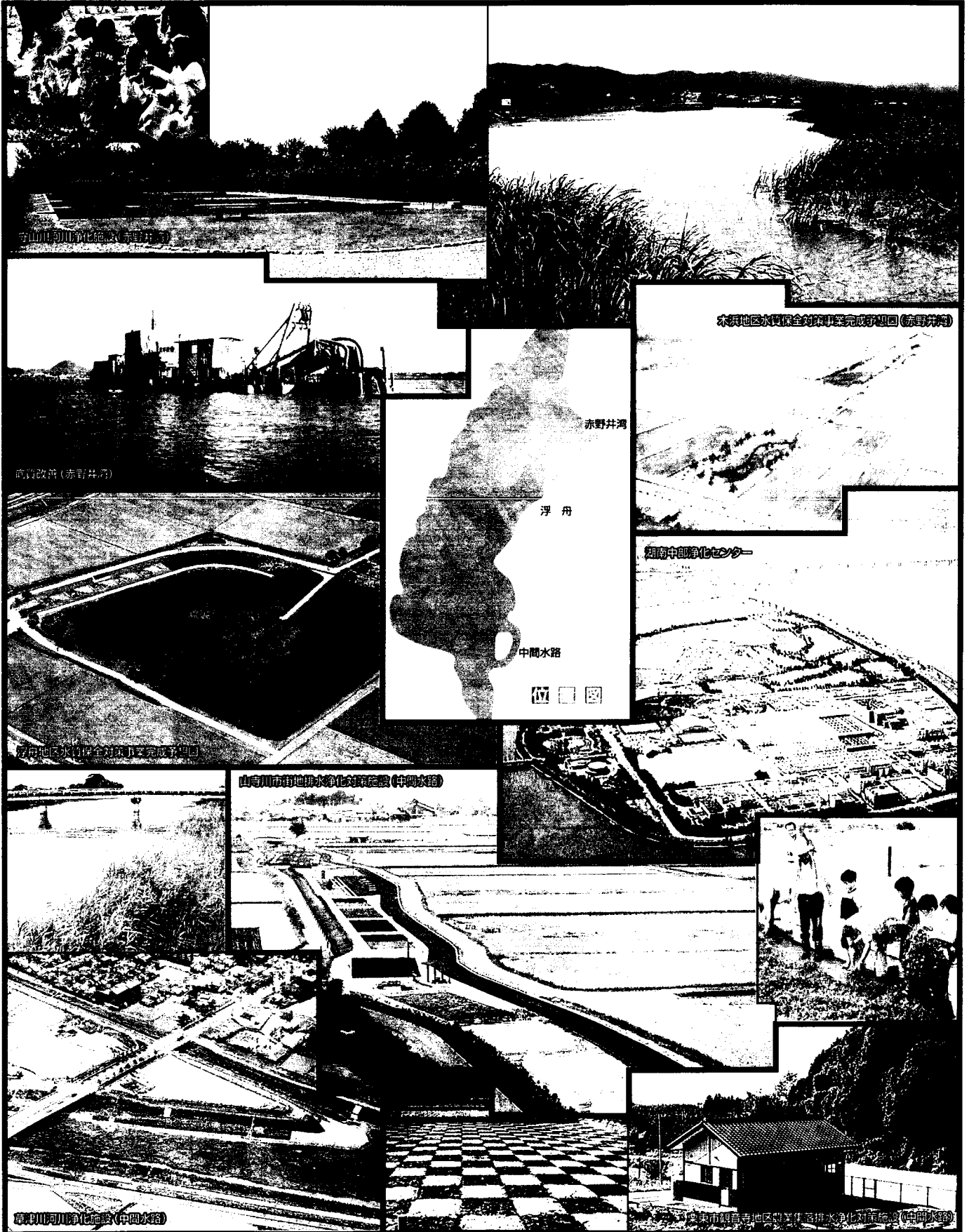
[お問い合わせ]

国土交通省 近畿地方整備局 琵琶湖工事事務所 水質調査課
〒520-2279 大津市黒津4丁目5番1号
TEL:077-546-0844(代) FAX:077-546-0873

高こうどう

第5号 2004/MAR.

琵琶湖水質保全対策行動計画



守山川浄化施設(赤野井河)

木浜地区水質保全対策事業完成予定地図(赤野井河)

高野改修(赤野井河)

赤野井河

浮舟

江南中部浄化センター

中間水路

位置図

木浜地区水質保全対策事業完成予定地図

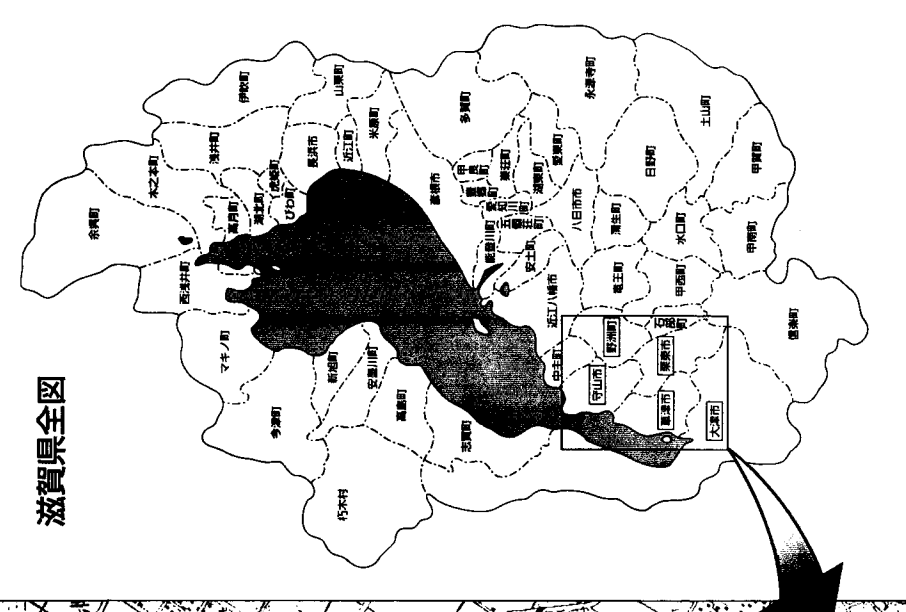
山崎川浄化施設(中間水路)

草野川浄化施設(中間水路)

奥東市朝宮寺地区排水浄化対策施設(中間水路)

行動計画事業位置図

滋賀県全図



水質保全対策事業
 H14 水質浄化施設 (浄化型排水路・南部浄化池)
 H15 水質浄化施設 (浄化型排水路・南部浄化池)

水質保全対策事業
 H14 実施設計池
 H15 灌漑設備用地買収

河川浄化事業
 H14 浚渫工 水質浄化施設 (一時貯留池)
 H15 浚渫工 水質浄化施設 (一時貯留池)

水質保全対策事業
 H14 実施設計 水質浄化施設 (ゲート)
 H15 管理棟 給水栓設置 水質浄化施設 (密閉型排水路・防塵機・ゲート)

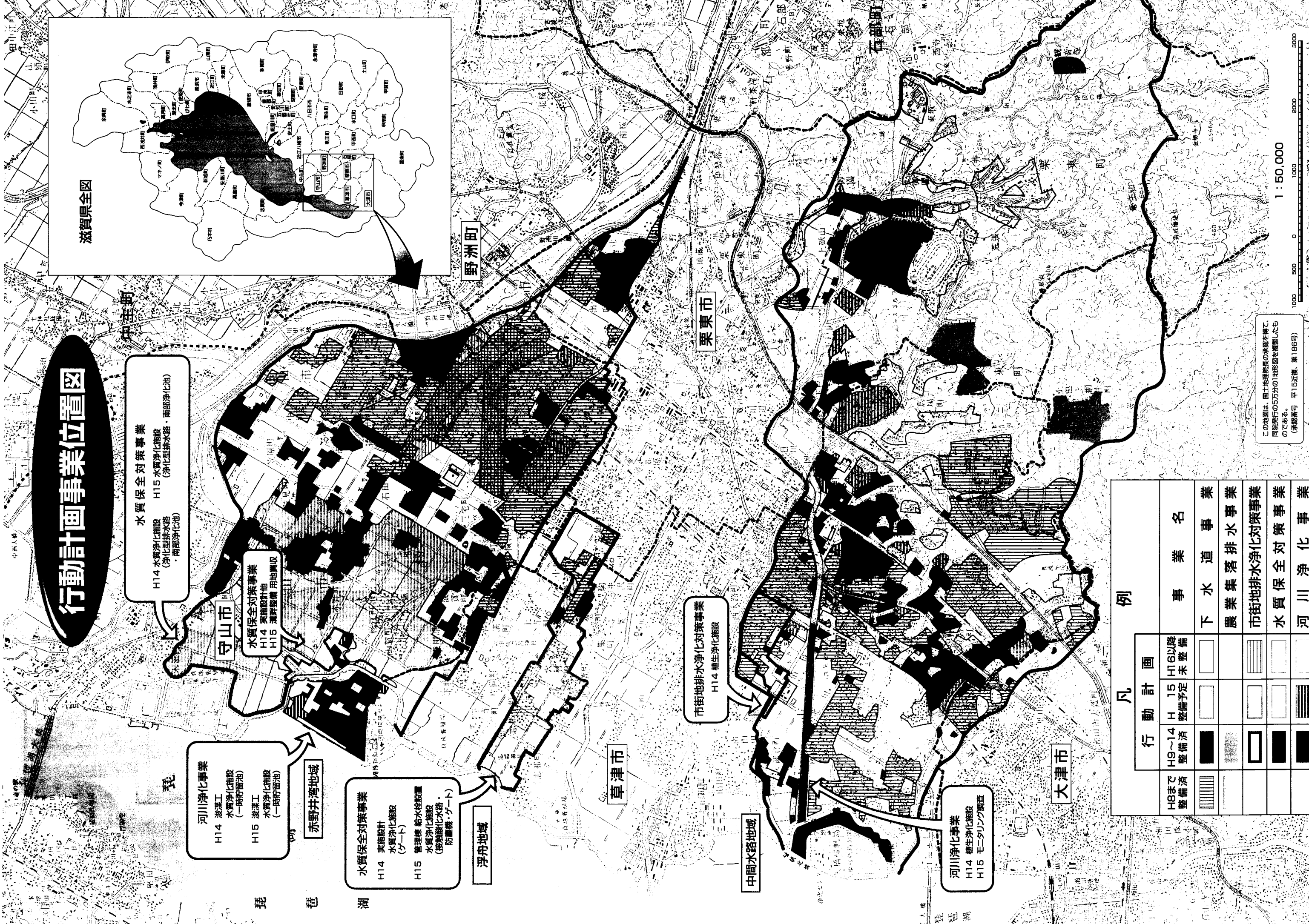
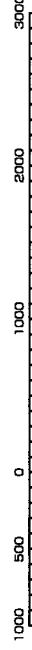
市街地排水浄化対策事業
 H14 複生浄化施設

河川浄化事業
 H14 複生浄化施設
 H15 モニタリング調査

行 動 計 画		凡 例		事 業 名
H8まで 整備済		H9~14 整備済		下 水 道 事 業
H9~14 整備予定		H15 未整備		農 業 集 落 排 水 事 業
				市街地排水浄化対策事業
				水質保全対策事業
				河 川 浄 化 事 業

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院長発行の5万分の1地形図を複製したものである。
 (承認番号 平15近灌、第186号)

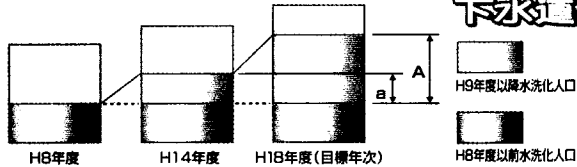
1 : 50,000



地域	事業名	計画量		実施状況		進捗状況					備考
		対策指標	計画量	完了したもの	実施中のもの	0%	20%	40%	60%	80%	
赤野井湾	下水道事業	水洗化人口	32,007人	20,417人	19人	63.8%					総普及率 96.7% 総水洗化率 87.4%
	市街地排水浄化対策事業	対象面積	220 ha	0 ha	0 ha						
	水質保全対策事業	対象面積	702 ha	0 ha	632 ha						
	河川浄化事業(流入河川対策)	対象河川	8河川	1河川	1河川	12.5%					
	河川浄化事業(底質改善対策)	浚渫面積(県)	108 ha	55.5 ha	7.8 ha	51.4%					
中間水路	下水道事業	水洗化人口	49,667人	35,433人	961人	71.3%					総普及率 89.7% 総水洗化率 88.9%
	市街地排水浄化対策事業	対象面積	110 ha	80 ha	- ha	72.7%					
	農業集落排水事業	水洗化人口	425人	320人	-人	75.3%					
	河川浄化事業(流入河川対策)	対象河川	1河川	0河川	1河川						
	河川浄化事業(底質改善対策)	浚渫面積(県)	54 ha	27.3 ha	- ha	50.6%					
浮舟	下水道事業	水洗化人口	1,465人	691人	-人	47.2%					総普及率 46.8% 総水洗化率 89.9%
	水質保全対策事業	対象面積	144 ha	0 ha	144 ha						

※1 下水道事業と農業集落排水事業の計画量は、平成9年度から平成18年度までの水洗化人口増加分
 ※2 「完了したもの」とは、平成14年度までに整備済み量。(下水道事業及び農業集落排水事業については平成9年度から平成14年度の間に新たに水洗化された人口。)
 ※3 「実施中のもの」とは、平成15年度実施予定量。
 ※4 中間水路の底質改善対策について、当面の事業は平成10年度で完了したが、今後は現地調査を行いながら追加実施について検討する。

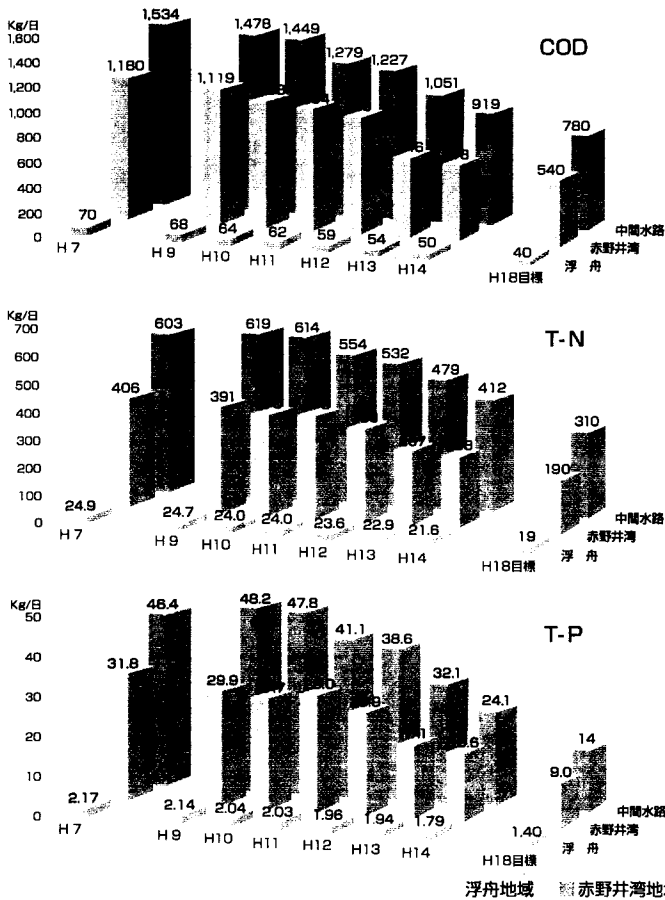
下水道事業の進捗率の考え方



解説

本計画における下水道の計画量は、計画策定年度から目標年度までの水洗化人口の増加(A)で表します。
 従って、例えば行動計画におけるH14年度の下水道の進捗率はa/Aとなり、H8年度までに既に水洗化されていた方は進捗率からは除外されるので、その区域全体の進捗率よりも低く算定されます。

流入負荷量の推移 (算定値)



水質状況

